

第1章 高岡市の歴史的風致形成の背景

1 自然的環境

（1）位置

高岡市は、本州のほぼ中央で日本海に面する富山県の北西部に位置し、県東部の
県庁所在地である富山市からは約20km離れており、県下第2の都市である。北は氷
見市、南は砺波市、東は射水市、北西は石川県の宝達志水町と津幡町、南西は小矢
部市に隣接する。市域は、東西に約24.5km、南北に約19.2kmにわたっており、面
積は209.57km²を有する。



高岡市の位置

（2）地形・地質・水系

本市の西側は山間地で、海老坂断層で分断された西側は石川県境から続く西山丘陵、東側は古くから信仰の対象として崇められてきた二上山（274m）が連なる。二上山は能登半島国定公園に含まれ、この二上山が絶壁となって接する富山湾は本市の北側を囲んでいる。富山湾に面する雨晴海岸は、二上山と同じく能登半島国定公園に含まれるほか、「日本の渚百選（「日本の渚百選」中央委員会選定）」にも選ばれている。また、雨晴海岸の女岩及び義経岩は、「おくのほそ道の風景地一有磯海一」に指定されている。本市の東側は、射水平野、砺波平野の一角である水の豊かな穀倉地帯が広がる。平野部西寄りを流れる小矢部川は、流れが緩やかで水量が豊富なため、その河口は古くから港として利用されてきた。一方、東寄りを流れる庄川は度々氾濫を起こしてきた急流であり、頻繁に河道を変えながら広い扇状地をつくってきた。江戸時代よりこの2大河川は建築資材である木材や米の運搬に利用されたほか、その水運と豊富な水によって川沿いに立地する戸出、福岡、中田、吉久といった在郷町が発展したと言える。この平野部のほぼ中央に位置するのが、標高10～20mの高岡台地、佐野台地であり、高岡台地上には現在の市街地が形成された。

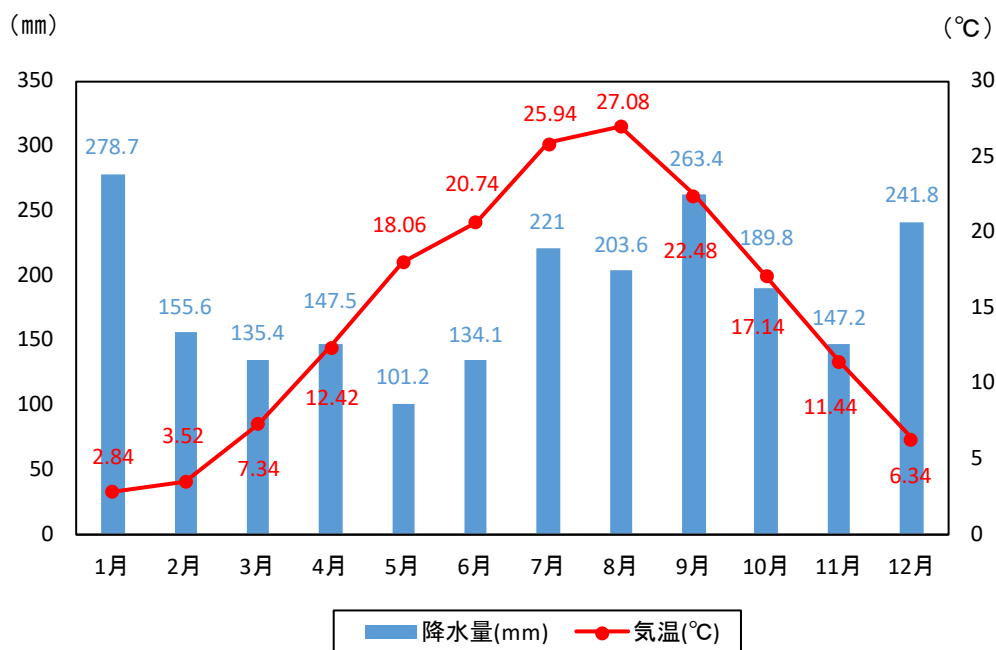


地形分類図（1/150,000）

〔資料：高岡市教育委員会『高岡市前田利長墓所調査報告』（平成20年（2008））〕

（3）気象

気候は日本海側気候に属し、四季の変化が割合にはっきりしている。年間降水量は平均2,219mmであり、冬期には、暖流の対馬海流上で水蒸気を蓄えた北西の季節風が強く吹きつけるため、北陸特有の曇天の日が多く、降雪量も多いが、年間を通して見ると平均気温は14度前後と比較的温暖である。



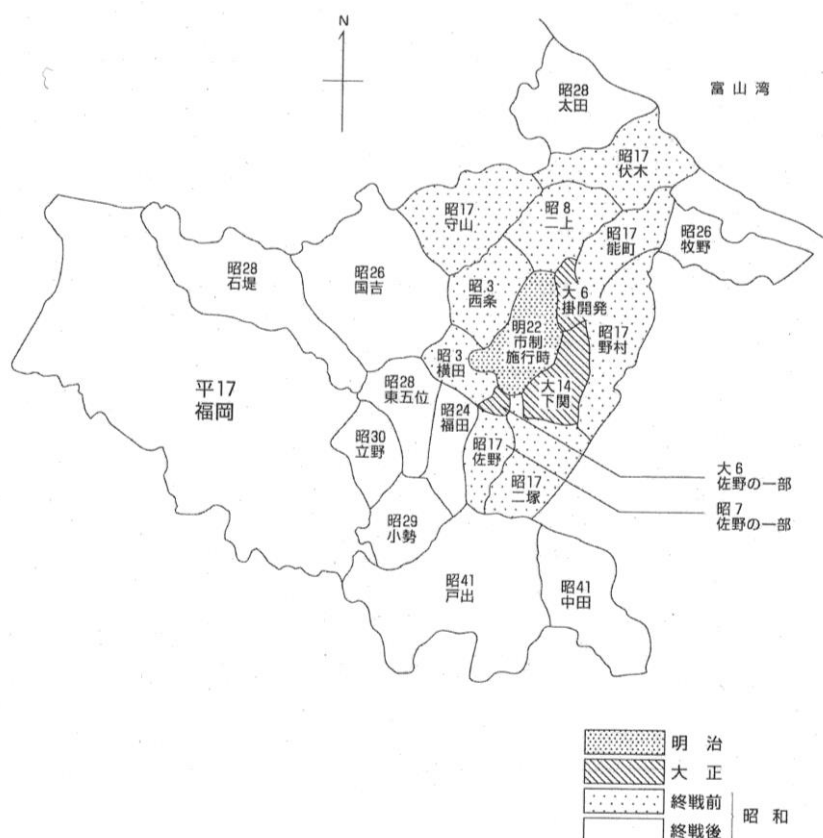
高岡市の降水量及び気温の平年値（2015～2019）

[資料：気象庁のデータを基に作成]

2 社会的環境

（1）市の沿革

本市は、明治 22 年（1889）の市制施行に伴い、全国で最初の 31 市の一つとして誕生し、その後は、周辺の町村との数度の編入によって市域を拡大していった。昭和 17 年（1942）には良港を有する伏木町^{ふしき}、戦後には太田村^{おおた}などの周辺村部、昭和 41 年（1966）には戸出^{といで}、中田^{なかだ}両町と合併した。平成 17 年（2005）には当時の高岡市^{かくおかまち}と福岡町が合併し、現在の市域となった。

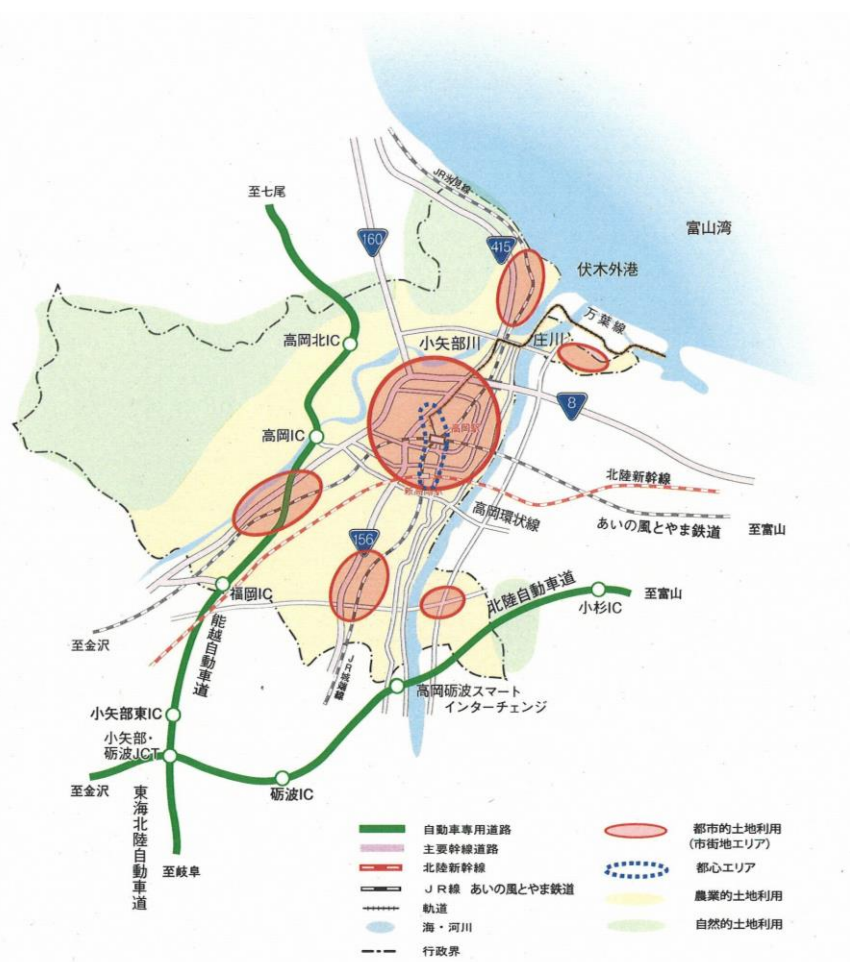


市域の変遷

[資料：高岡市の都市計画]

（2）土地利用

土地利用は、市域の3分の1が都市的土地利用であり、3分の2が農業的土地利用と自然的土地利用となっている。本市の市街地は、市制施行（明治22年（1889））当時の市域を中心とした中心市街地と、伏木港を中心とした伏木や、戸出、中田、牧野、立野、福岡などで構成される。住宅地は商業地を取り巻く形で形成されており、中心市街地や伏木では、店舗や中小零細企業などが混在する木造密集地域が多い一方、戸出・中田などでは、土地区画整理事業や民間開発、団地開発による住宅地が造成されている。また、工業地は、伏木港周辺から小矢部川沿岸にかけての地域、中心市街地西側の金屋町周辺から小矢部川右岸にかけての地域に広がっており、金屋町周辺では銅器や漆器の中小工場と住宅等が混在し、戸出・中田及び小矢部川左岸には工業団地が形成されている。商業地は、中心市街地のほか、伏木・戸出・中田・立野・福岡にも形成されており、幹線道路沿いにも商業施設の立地が見られる。このように、地域ごとに独立した市街地の変遷を持ち、土地利用においても地域によって異なる特徴のあることが見て取れる。



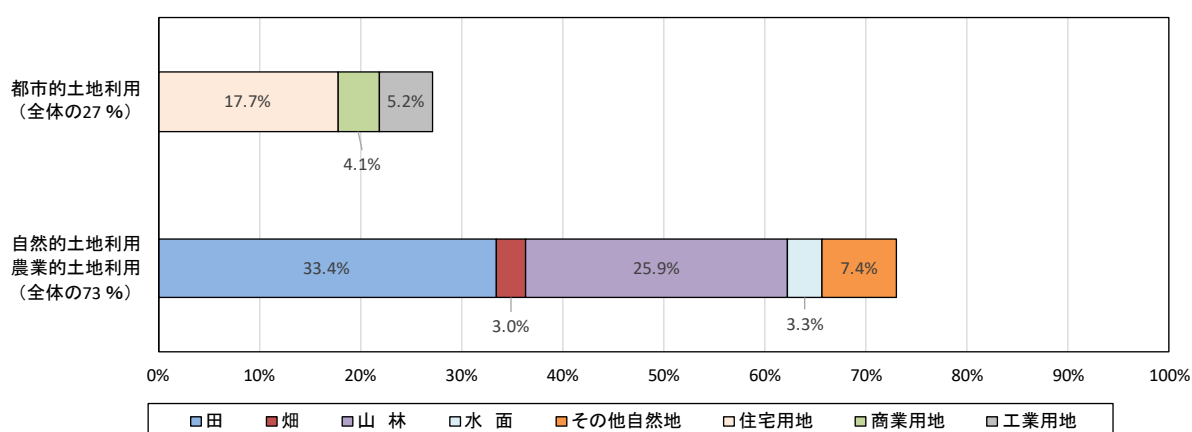
土地利用概念図

[資料：高岡市総合計画基本構想・第3次基本計画]



土地利用概念図

[資料：高岡市総合計画基本構想・第3次基本計画]



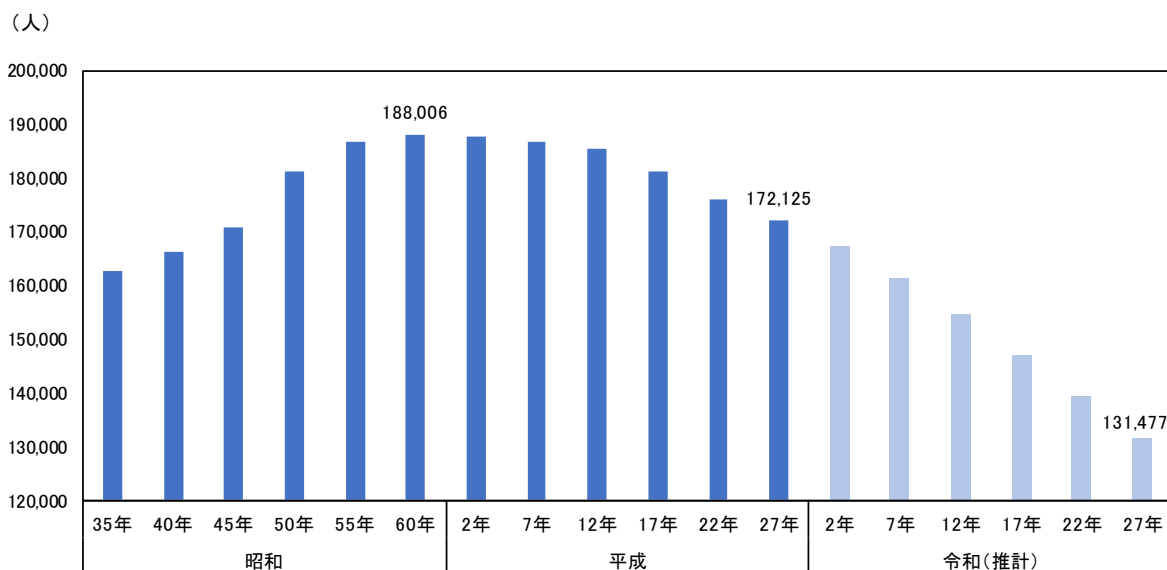
土地利用の百分率図

[資料：平成30年度高岡市都市計画基本調査業務委託成果を基に作成]

（３）人口動態

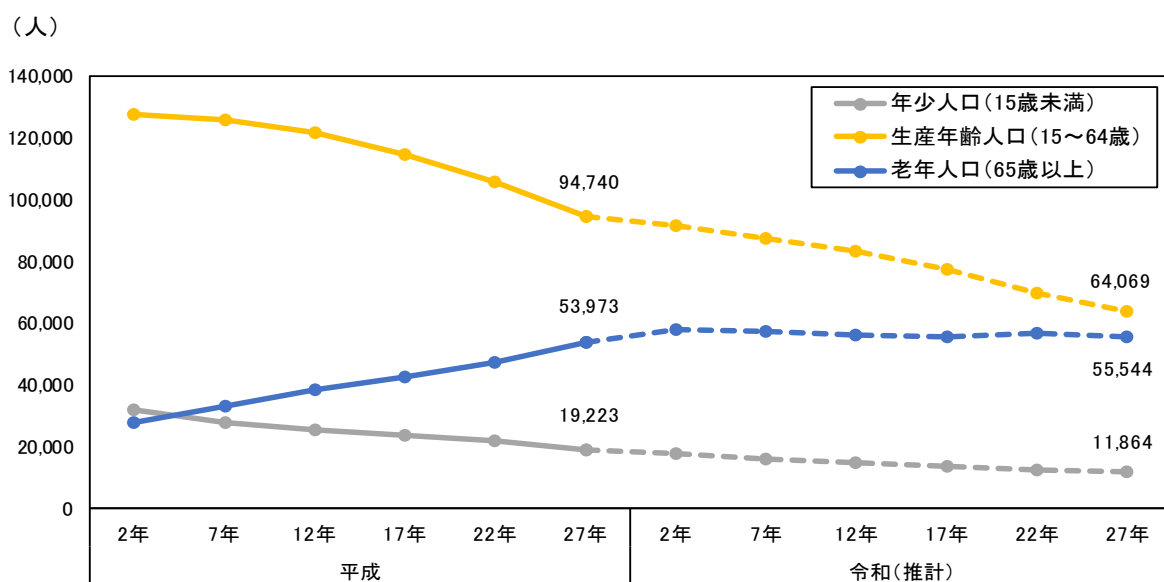
国勢調査の結果によると、本市の総人口は昭和60年（1985）に188,006人をピークに迎え、それ以降は減少しており、平成27年（2015）には172,125人となっている。

年齢別人口の推移については、年少人口、生産年齢人口ともに減少傾向であるが、老年人口は増加傾向にある。平成27年（2015）では、約3割を老年人口が占めている。



総人口推移

[資料：国勢調査、国立社会保障・人口問題研究所の推計]



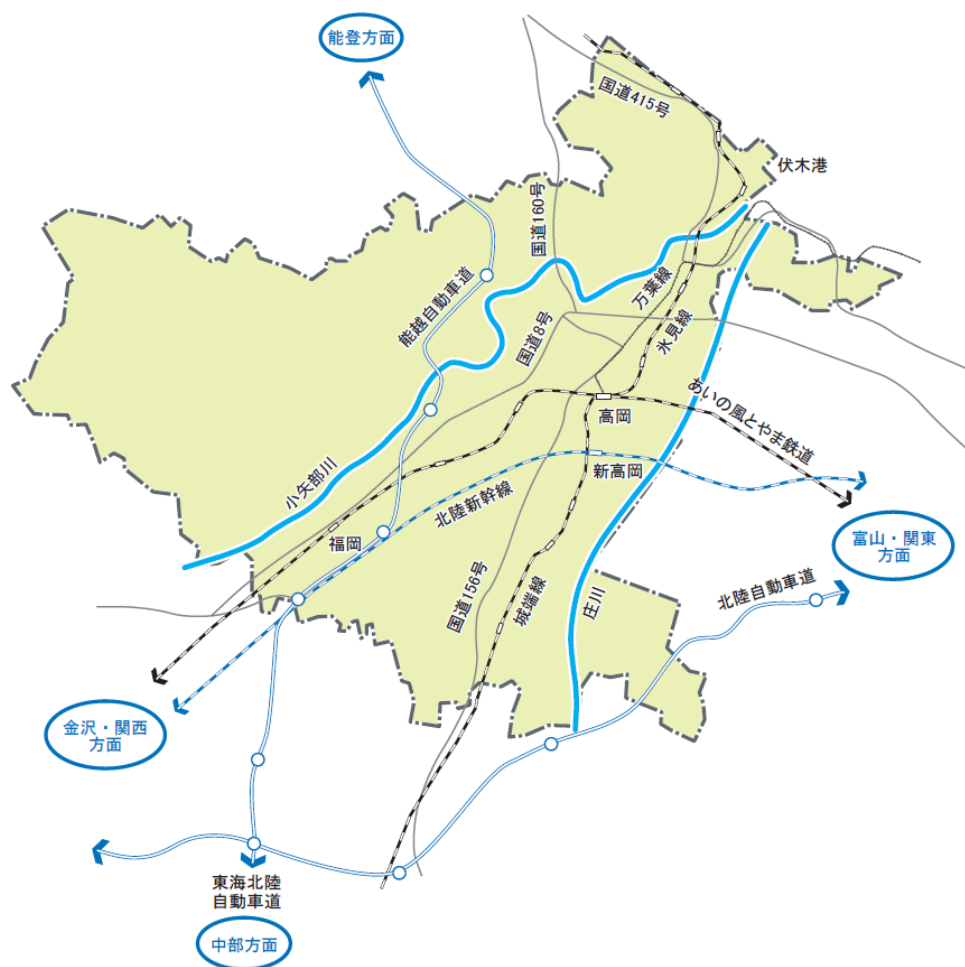
年齢別人口推移

[資料：国勢調査、国立社会保障・人口問題研究所の推計]

（4）交通機関

利長は、高岡に城下町建設の折、街道を小矢部川おやべがわの左岸をふたがみやま通って二上山のふもとで小矢部川を渡るルートから、今石動いまいするぎで小矢部川を渡り福岡ふくおか、立野たての、通町とおりまちなどを抜け高岡を経由するルートに変更し、この道に沿って町割りを行った。高岡城が一国一城令により築城間もなく廃城となった際も、利常が、街道を小馬出町こまだしまちで右折し坂下町さかしたまちや定塚町じょうづかまち、蓮花寺れんげじを通るルートに変更するなどし、街道や河川を通じて物資が集散する商工業の町への転換を図った。このとき整備された町並みは、現在も高岡駅から程近い市の中心商業地区としての機能を有している。この街道を継承し、新潟県から京都府までを結ぶ道路が現在の国道8号である。国道8号は市内を横断する形で延び、四屋交差点よつやからは国道156号、国道160号が分岐し、それぞれ砺波・岐阜方面、氷見・七尾方面へと繋がっている。高規格幹線道路の能越自動車道は国道8号を交差して小矢部砺波JCTおやべとなみまで走り、高速道路の北陸自動車道と平成20年（2008）に全線開通した東海北陸自動車道に接続する。

一方、鉄道網としては幹線鉄道であるあいの風とやま鉄道線のほか、地方交通線としてJR城端線じょうはな、JR氷見線ひみが運行し、高岡駅から射水市越ノ潟までを万葉線が結んでいる。さらに、平成26年度（2014年度）には長野—金沢間で北陸新幹線が開業し新高岡駅が整備された。海上交通に目を向けると、古くから沿岸交易の要港として栄えていた伏木富山港ふしきとやまこうは、昭和61年（1986）に特定重要港湾（現・国際拠点港湾）に認定され、多目的国際ターミナルの完成、港へのアクセス道路伏木万葉大橋ふしきまんようおおはしの開通により、今後ますます環日本海交流の要地としての役割が期待される。



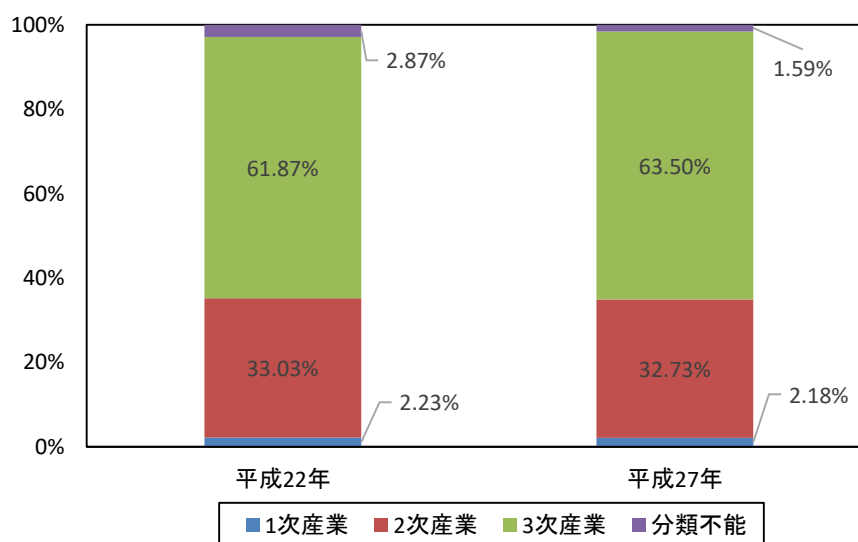
高岡市の主要交通網

[資料：都市計画マスタープラン一部加工]

（５）産業

本市の産業の中でも、利長の町立^{としなが}て以来発展してきた銅器、漆器などが伝統産業として位置付けられてきた。伝統的な産業は、先人のたゆまぬ努力によって培われた匠の技術・技法を今日まで継承し、独自の発展を遂げてきている。また、伝統的な鋳物技術を基に、豊富な水資源と安価で安定した電力供給を背景として昭和初期から発展してきたアルミニウム産業は、鍋・釜などを中心とした製品から、高度経済成長に伴いアルミ板加工に移り変わり、住宅用サッシなどの建材やアルミホイールなどが生産されるなど、その製品も多岐に渡っている。福岡^{ふくおか}では、菅笠^{すががさ}づくりや養鯉^{ようり}業が産業として培われてきており、菅笠^{すががさ}については、国内最大の生産地となっている。

産業全体でみると、事業所数、就業者数とも第2次・第3次産業の占める割合が高く、商工業都市としての性格を色濃く留める。

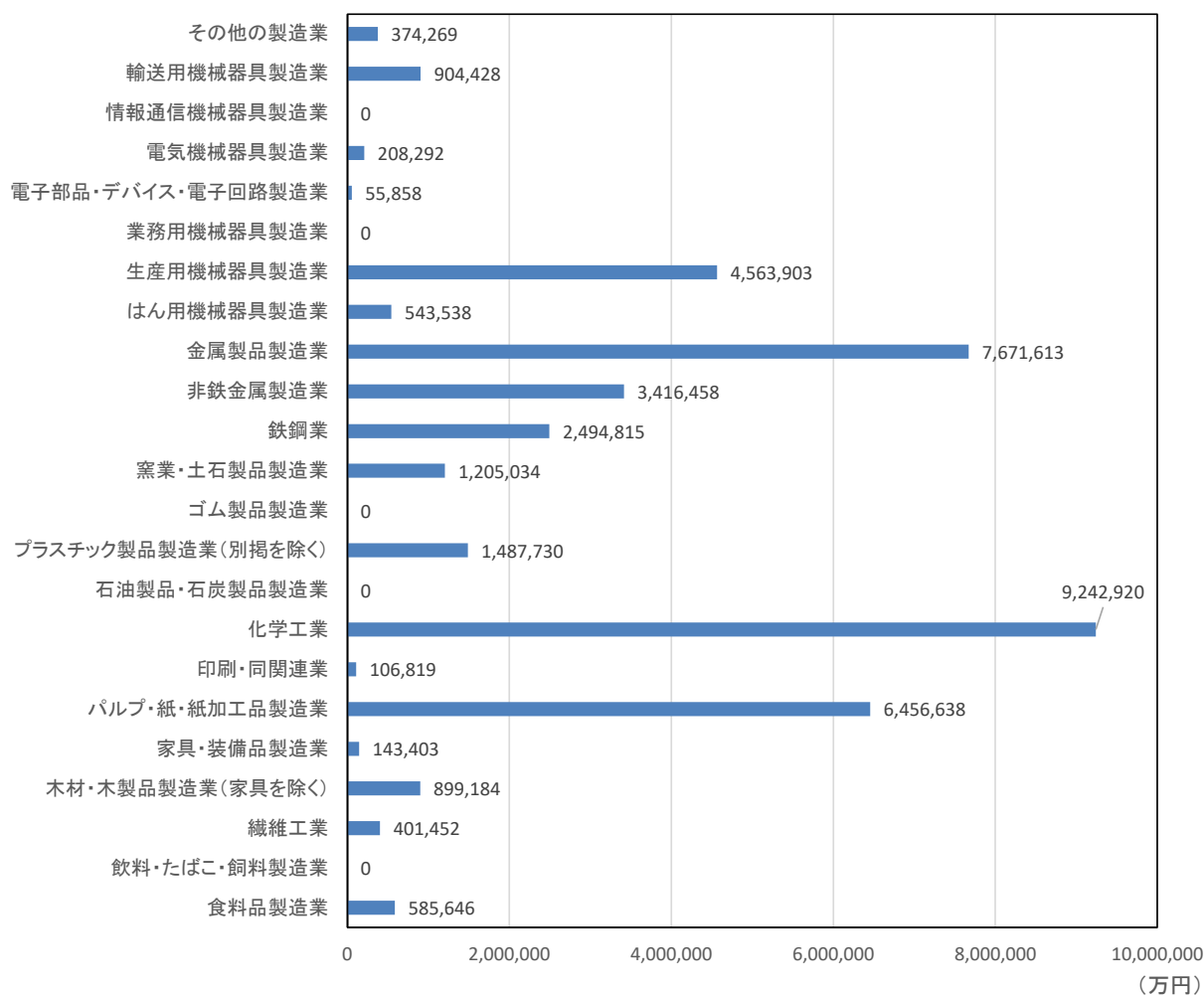


産業分類別就業者割合の推移

[資料：国勢調査]

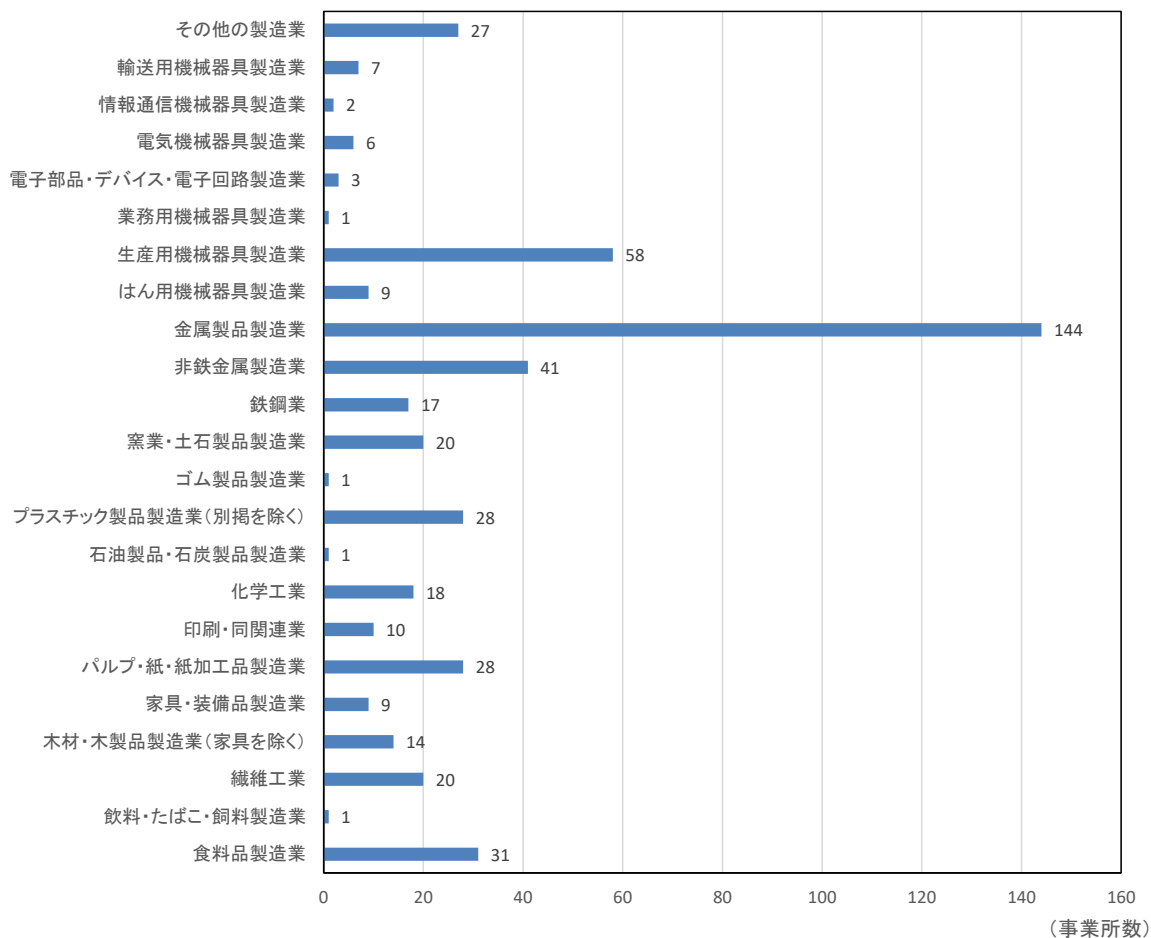
①製造業

本市の製造業は、平成29年（2017）の工業統計における製造品出荷額等では、「化学工業」、「金属製品製造業」、「パルプ・紙・紙加工品製造」の順で高く、この3つを合わせると全体の約6割を占めている。特に、「金属製品製造業」は、銅器の鋳物技術を基に、豊富な水資源を利用し昭和初期から発展しており、住宅用・ビル用建材の生産では全国有数の産地である。また、事業所数については、「金属製品製造業」が最も多く、次いで「生産用機械器具製造業」、「非鉄金属製造業」となっている。



産業分類別の製造品出荷額等

[資料：工業統計]



産業分類別の事業所数

[資料：工業統計]

②伝統産業

古くから育まれた本市の伝統産業は、全国に誇りうる地場産業として目覚ましい成長を遂げた。

銅器・漆器産業ともに、「高岡銅器」、「高岡漆器」として昭和50年（1975）に伝統的工芸品として国の産地指定を受けている。産地の特徴としては、工程別の分業体制が確立されており、事業所規模は小さく、職人集团的色彩が強いことが大きな特徴である。特に、高岡漆器は、幕末から明治期にかけて「彫刻塗」^{ゆうすけぬり}「勇助塗」^{あおがいぬり}「青貝塗」などの独創的な技法が確立され、これらの技は、歴代の名工によって伝えられ、重要有形民俗文化財の高岡御車山^{たかおかみくるまやま}に凝縮されており、高岡の文化として今日に継承されている。

また、高岡銅器彫金の伝統を受け継いだ技法を展開している産業に、仏壇の生産があげられる。高岡の仏壇は、材料にクサマキ・イチョウ材を使用していることにより、長年の耐久力は最も優れていると言われている。独自の工法による耐久力に優れた表金具の使用箇所が多いという特徴もあり、高岡における伝統の技術を継承しているも

のである。

菅笠産業は、平成 21 年（2009）に「越中福岡の菅笠製作技術」が重要無形民俗文化財に、平成 29 年（2017）には「越中福岡の菅笠」が国の伝統的工芸品として指定を受けた。菅笠は、撥水・防水、防虫・芳香などの特性を持ち、軽量であるため、農作業の日除け・雨除けの必需品として重宝されてきた。原材料の菅を地元で栽培し、全国に向けて出荷している。

③農業

平成 30 年（2018）の本市の農業産出額は、約 7 割がコシヒカリを中心とする米が占めている。次いで、鶏卵・肉用牛などの畜産、ほうれん草などの野菜となっている。



高岡市の特産品マップ

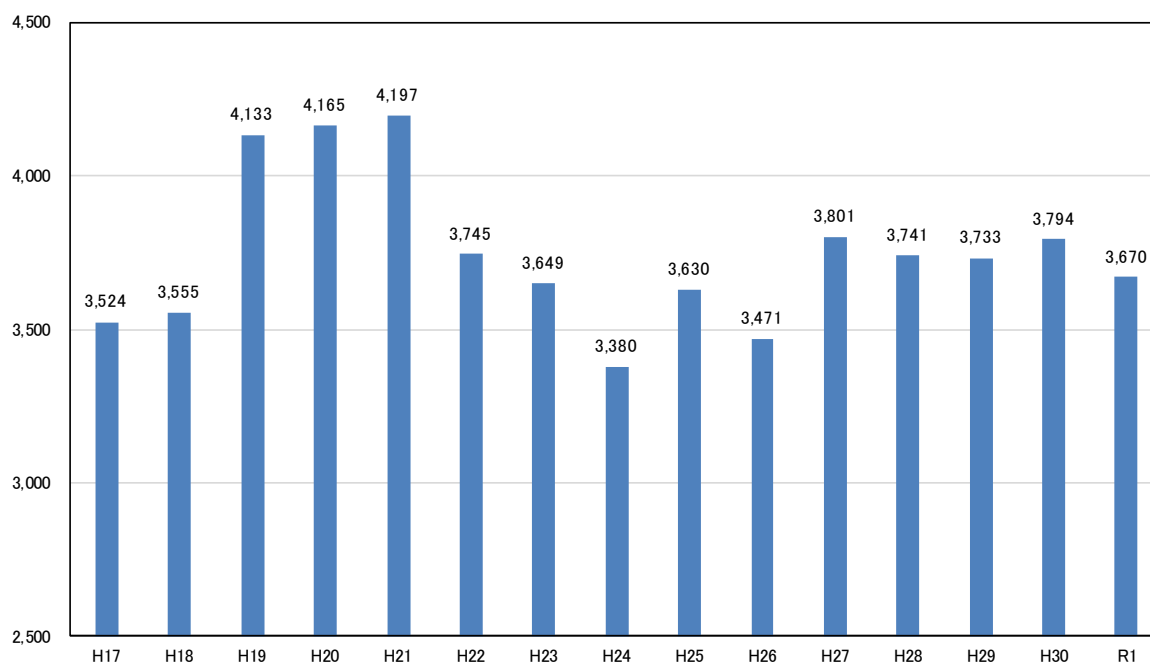
〔資料：高岡の地場食材産地マップ〕

④観光

本市には、国宝 瑞龍寺、国宝 勝興寺、史跡 高岡城跡、高岡大仏など、観光資源として PR できる指定文化財等が多く、このほか、道の駅「雨晴」から眺望できる雨晴海岸などの景勝地や、高岡御車山祭、伏木曳山祭（通称「けんか山祭」）、高岡万葉まつり（万葉集全二十巻 朗唱の会）、福岡町つくりもんまつり、中田かかし祭なども観光資源として活用している。これらは、観光客にとってどれも魅力的なものとなっている。

近年の観光入込客数は、平成 21 年（2009）をピークに減少傾向であったが、平成 27 年（2015）3 月に北陸新幹線が開業したことから、平成 27 年（2015）以降は回復基調である。

（千人）



観光入込客数の推移（平成 17 年～令和元年）（2005～2019）

[資料：高岡ミニデータ]

3 歴史的環境

(1) 歴史

①原始・古代

本市は、周囲に^{となみ}砺波平野や^{いみず}射水平野といった北陸を代表する穀倉地帯があり、東西は^{しょうがわ}庄川・^{おやべがわ}小矢部川という大河川に挟まれ、北は日本海に面するという、非常に恵まれた環境に立地しており、古くから人々の営みが見られた。

その歴史は旧石器時代まで遡るものであり、^{ふるじょうづか}古定塚遺跡や^{いわさき}岩崎遺跡、^{この}小野遺跡などで旧石器時代のナイフ形石器等が発見されている。

縄文時代には、狩猟・漁労・採集生活が盛んになり、小さなムラが形成されるようになった。なお、この時代の遺跡は多くが^{おやべがわ}小矢部川の左岸、特に^{ふたがみやま}二上山丘陵と^{にしやま}西山丘陵の縁辺を成す台地上に点在しており、平野部では高岡台地や佐野台地に分布している。

弥生時代中期には、大陸から北九州に伝わった農耕文化が富山県域にも伝わっており、扇状地の末端や微高地、自然堤防上に集落が立地し、近辺の沼沢地や河川流域の低湿地で水田耕作が営まれるようになった。また、この頃から集落の内部で身分階層の分化が進み、指導者が生まれ、有力な集落を核とした地縁集団が形成され、その中心的指導者が豪族や首長へと成長していった。

豪族や首長による支配社会が形成される中で、畿内から広まった古墳文化は高岡市域にも伝わっており、^{ふたがみやま}二上山丘陵や^{にしやま}西山丘陵には古墳や横穴墓の濃密な分布をみることができる。また、奈良時代には^{ふしき}伏木の地に越中国府が置かれ、越中における政治・経済の中心として栄え、万葉集の代表的歌人である^{おおとものやかもち}大伴家持が国守として赴任し、^{あまはらし}雨晴海岸など当地の風光明媚な自然などについて数多くの秀歌を詠んでいる。



大伴家持像



雨晴海岸

②中世

平安時代末期になると、各地で源氏・平氏の争乱が始まり、越中でも在地の武將を巻き込んだ激しい争いが起きており、寿永2年（1183）には木曾義仲が越中の国府で軍勢をまとめ、倶利伽羅峠で平維盛を破っている。また、平氏滅亡後、源頼朝に追われた源義経は現在の高岡市域を通り平泉に向かったと伝えられ、義経一行が雨宿りしたという義経岩が残っている。



義経岩

高岡市域では、鎌倉時代・室町時代の間に守護所の位置が伏木から放生津、守山と移され、二上山丘陵や西山丘陵には戦国大名等の居城として守山城や木舟城、鴨城など多くの山城・平城が築かれている。



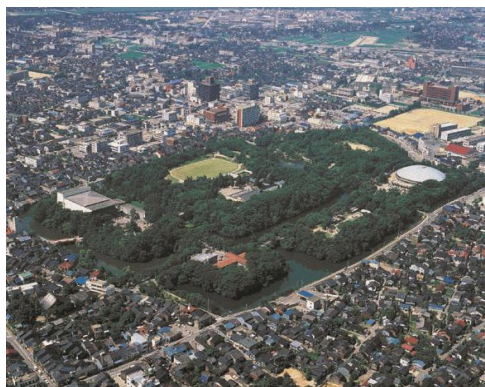
守山城跡・二上山

また、中世は仏教諸宗が広まった時代で、五山系禅宗寺院や時宗、浄土真宗などの寺院が各地に建てられた。特に浄土真宗は、真宗王国といわれるほどの勢力に拡大した。室町時代後期には一向一揆が各地で起こり、勝興寺など真宗寺院が強大な勢力を誇った。

③近世

i) 城の建設と城下の町立て

現在の高岡の中心市街地の基盤が形成されたのは近世初期のことである。天正13年（1585）、豊臣秀吉より砺波・射水・婦負の3郡を与えられた前田利勝（後の利長）は、守山城主となり城下に町を築いたが、慶長2年（1597）に富山へと居城を移した。その後、利常へ家督を譲り隠居していた利長は、富山城焼失を契機に、慶長14年（1609）、それまで荒地であった「関野」と呼ばれる地に高岡城と城下町を築いた。これが現在の高岡中心部のルーツである。



高岡城跡

高岡城跡とその周辺では3段の地形面が識別され、上段は高岡城跡の面、中段は片原町面、下段は川原町面である。利長は城下建設時にルートを変更した街道

に沿って碁盤目状に町割りを行い、上段に城と武家地、中段及び下段に町人地を配した。その際、移住町人には土地の無償提供や地代免除などの特権を与え、職種ごとに居住地を割り振った。例えば、刀鍛冶が召し寄せられたことに由来する利屋町とぎやまちや、白銀師が居住していたと伝わる白銀町しろがねちょうなど、今でも町名にその名残を見ることができる。また、上段には荒川用水あらかわ、中段に庄方用水しょうかた、下段には川原用水かわらをそれぞれ流すことで掘割とし、町域を明確にするとともに、外部に対しての防御線としている。さらに、利長としながは寺社の配置にも配慮しており、曹洞宗・真言宗の寺を防御上の砦として中心市街地南端に配し、一方で一向一揆を防ぐ目的から浄土真宗の寺を市街地内部に取り込み、周辺の百姓が一揆の拠点にしないようにした。



高岡城跡を北より望む（平成 18 年（2006）撮影）

高岡市立博物館提供

ii) 城下町から商工業の町への転換

利長としながによる城下町の建設手法は、加賀藩の藩都である金沢や日本を代表する城下町である江戸などと多くの共通点を有している。しかし、高岡の都市としての発展は、他の城下町とは異なる道を歩いてきた。これは、高岡城が利長の死と元和元年（1615）の一国一城令により、築城後わずかのうちに廃城となり、武士を中心とする社会構造が成熟しなかったため、利常としつねによる商工振興策や町民らの努力により商工業都市としての発展を遂げることとなった。

高岡城の廃城後、城下の荒廃を憂いた利常としつねは、元和 6 年（1620）に高岡町人の他所転出を禁じた。その上で、寛永 12 年（1635）に布を検印する町役人である布御印ぬの ごいん押人おしにんを置き、高岡を麻布の集散地とした。さらに、承応 3 年（1654）には御荷物宿おにもつやど、明暦 3 年（1657）には魚問屋うおどんやや塩問屋しおどんやの創設を認め、古城内には藩に納められる米や塩を保管する御収納蔵ごしゅうのうくらと御詰塩蔵おつめしおくらを設置するなど、高岡の商工業都市への転換策を積極的に図った。

また利常としつねは、城を迂回していた街道のルートを町中へ通るように変更し、町の外れにあった寺院群を町中へと移動させた。

加賀藩ではその後も利常の意思が引き継がれ、寛文 11 年（1671）には締綿市場ていめんが設置されるなど、高岡は着実に商工業都市へと変貌を遂げていった。

iii) 商工業都市を支えた流通システムと周辺の町々

高岡の経済基盤を支えた麻布や米の交易を可能にしたのは道や河川を利用した流通システムであり、これらの道沿いや河川の流域には、宿場町や在郷町^{ざいごうち}、港町などが発達した。

城下の建設にあたり、利長^{としなが}が最初に町立てに着手した木町^{きまち}は、小矢部川^{おやべがわ}と千保川^{せんぼがわ}（当時は庄川^{しょうがわ}の本流）が合流する付近にあり、両河川の合流付近が淵となっていたことから外海船の着岸が可能であったため、他地域間との

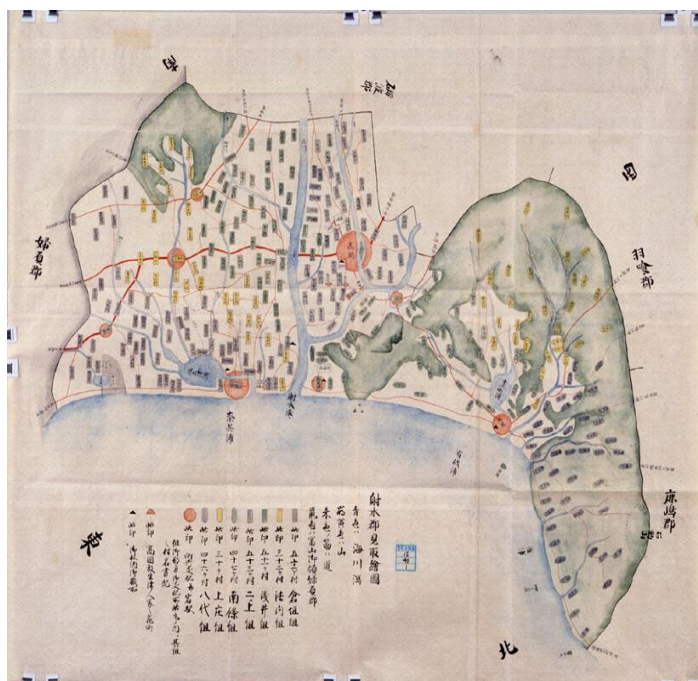
物資の流通を担っていた。正徳4年（1714）に小矢部川からの庄川切り離し工事が完工し、伏木^{ふしき}など他の浦方の台頭により次第にその地位は薄れていったが、それまでに果たした役割は大きい。

加賀藩は米の効率的な収集と円滑な流通を目的に、主要な河川や道沿いに年貢米を納める御蔵^{おくら}を設置した。これによって、高岡町周辺の地域では、主に道沿いを中心に、商工業の発展により在郷町や宿場町が形成された。特に、中世まで北陸道の主要往還筋であった戸出^{といで}・中田^{なかだ}往来やルート変更後の街道沿いに、戸出^{といで}、中田^{なかだ}、立野^{たての}、福岡^{ふくおか}などが発展した。

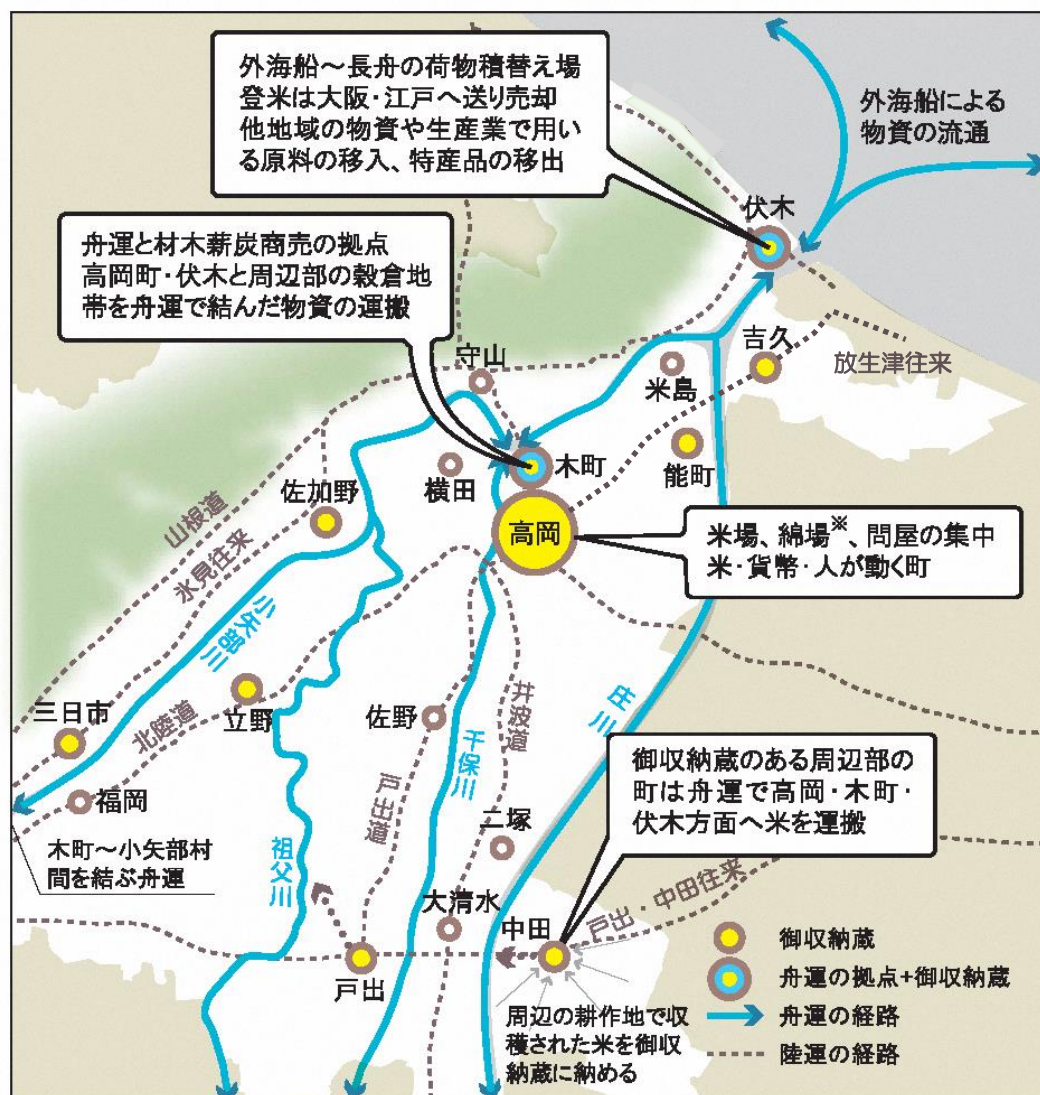
一方、小矢部川^{おやべがわ}や千保川^{せんぼがわ}を下ってくる米などの終着点であった伏木^{ふしき}は、加賀藩から渡航の許可、税の徴収など公的な役割を認められ、北前船（バイ船）を利用した交易により港町として発展した。当時の様子は、『射水郡見取絵図（文化5年(1808)）』にて見ることができる。



木町の舟着き場（大正の頃）



射水郡見取絵図（文化5年(1808)）財団法人高樹会蔵



※米場：米の出入や売買を監視する役割を担った。

綿場：加賀藩の主要産物であった木綿の原料綿を供給する役割を担った。

米、その他特産物の流通システム

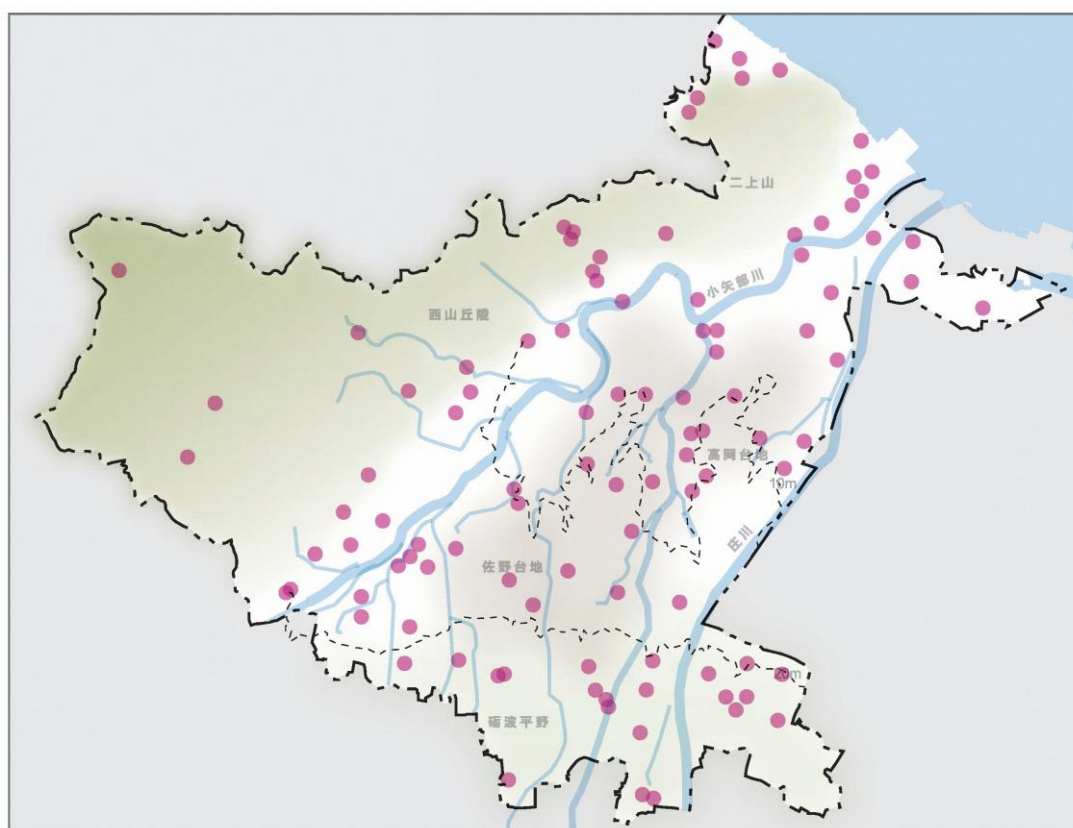
[資料：『高岡市歴史文化基本構想』（平成23年（2011）3月）一部修正]

iv) 多様な祭礼行事と獅子舞

本市では多様な形態の地域社会が形成された結果、古代からの神道や仏教などの広がりや相まって、様々な祭礼行事が生み出された。高岡御車山祭の御車山行事（重要無形民俗文化財）や二上射水神社の築山行事（富山県指定無形民俗文化財）、伏木神社春季例大祭の祭礼行事（高岡市指定無形民俗文化財）、氣多神社のにらみ獅子（高岡市指定無形民俗文化財）など、市を代表する無形民俗文化財のほか、田祭り・虫送りといった豊作祈願の祭礼行事、節句やお盆など年中行事などが生まれた。特に、春には豊作を祈って、秋には五穀豊穰に感謝して行われている獅子舞は、市内全域に分布しており、本市の民俗芸能を語る上で欠かせないものとな

っている。

平成17年（2005）の富山県教育委員会の調査では、高岡市内にある獅子舞は188件（うち27件は休止中）を数え、氷見獅子、砺波獅子、射水獅子、行道の獅子に分類される。氷見獅子、砺波獅子、射水獅子は胴幕の中に人が何人も入ったいわゆる百足獅子である。氷見獅子は氷見市を中心に分布されており、リズムカルな舞で演目は20種程あるとされる。砺波獅子は砺波平野一帯に分布されており、胴幕に竹が入る大きな獅子とされる。射水獅子は射水平野に分布しており、獅子あやしはシャグマと呼ばれる被り物を被った天狗とキリコ（花笠の子供2人）で、胴幕に竹は入らないとされる。行道の獅子は中世より続く歴史をもち、神輿行列などの露払い役として、古い箱型の獅子頭が練り歩くものである。



凡例 ●：獅子舞が行われている箇所

獅子舞保存分布

〔資料：『高岡市歴史文化基本構想』（平成23年（2011）3月）〕

v) 加賀藩ゆかりの伝統文化

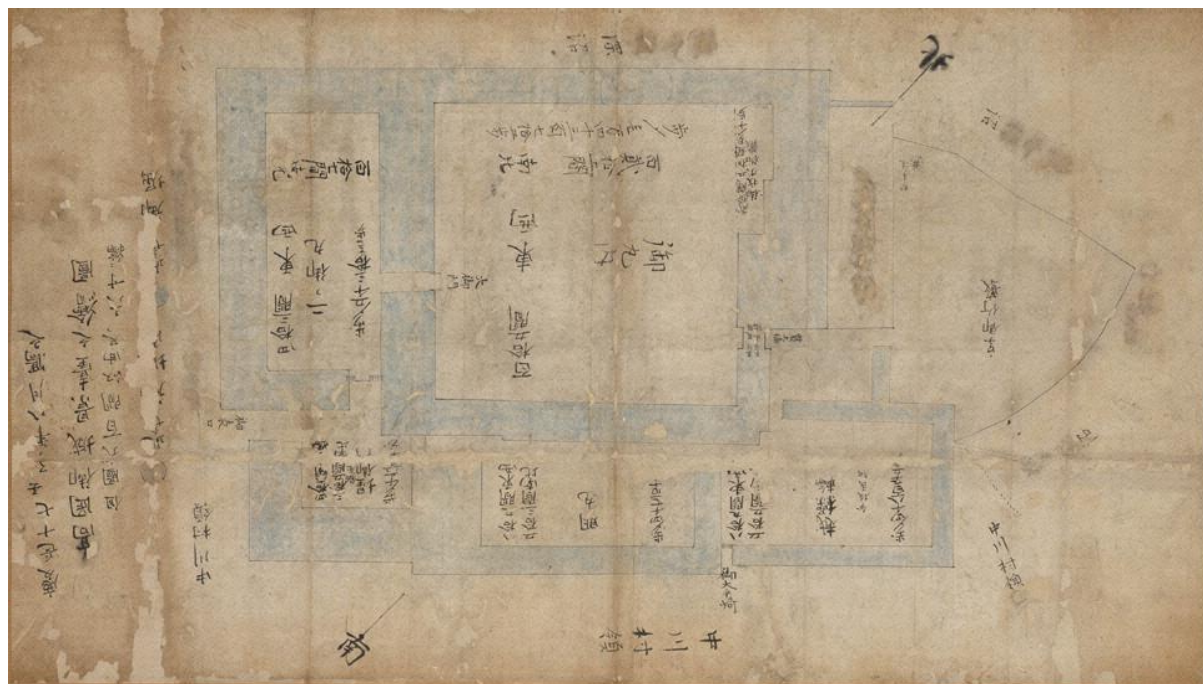
加賀藩では茶道を藩士の嗜みとして奨励していたため、武士たちと交流のあった町民たちの間にも次第に茶道が広がり、加賀藩領である高岡でも普及していった。町家では、凝ったしつらえの茶室が多く見られ、日常的にお茶が嗜まれ、毎年の行祭事にもお茶会が催されている。

また、能も加賀藩ゆかりの伝統文化である。瑞龍寺ずいりゅうじで毎年行われる薪能たきぎのうや燭光能しょうこうのうなどでは、高岡能楽会という団体によって幽玄な舞が披露されているが、もとは利長のとしなが33回忌法要の際に能楽師を招いて燭光能しょうこうのうを行ったことが始まりとされている。その技術は高く評価されており、野尻哲雄のじりてつお及び荒井亮吉あらいりょうきちは、重要無形文化財「能楽」（総合認定）保持者として認定された人によって構成される日本能楽会の会員となっている。

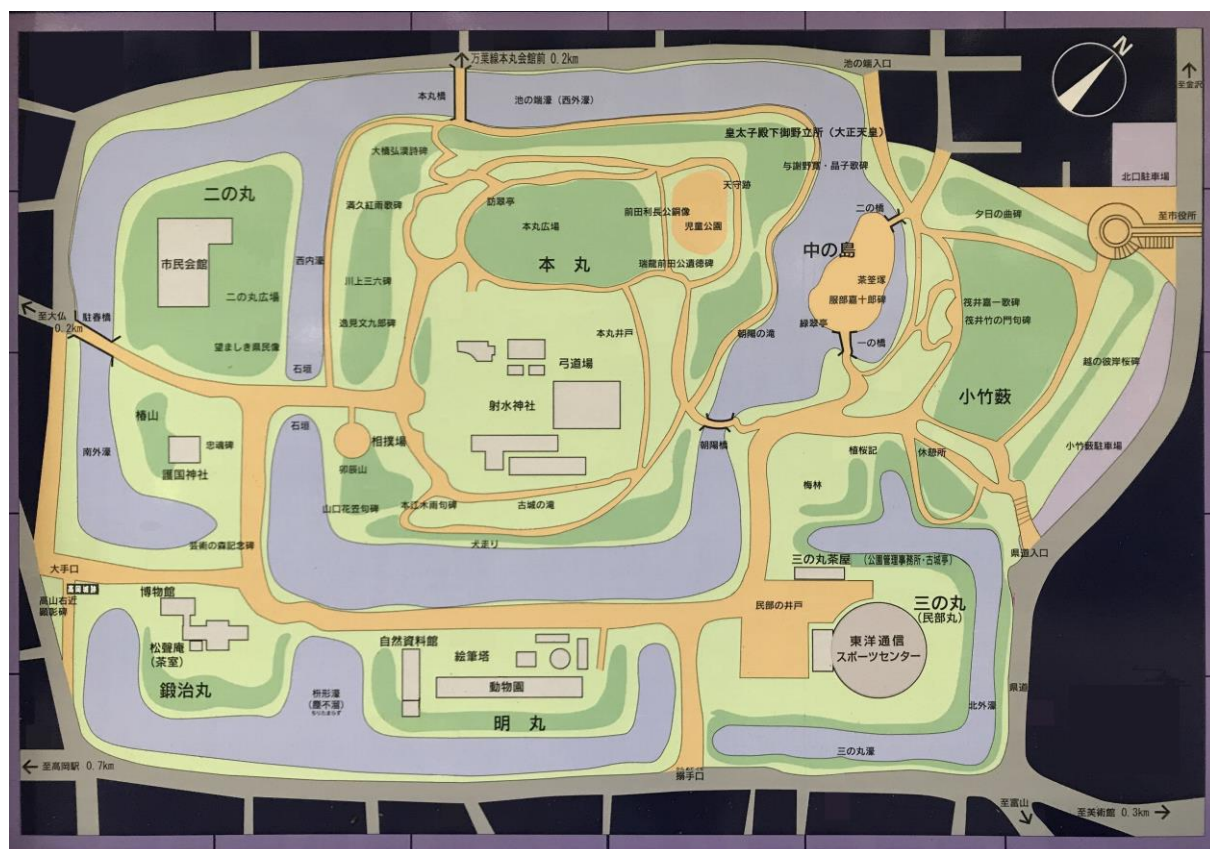
vi) 高岡城の保存と継承

高岡城の廃城後も城内は高岡町奉行所の管理下にあり、加賀藩の米蔵こめぐら・塩蔵しおぐら・火薬蔵やくぐら・番所ばんしょなどが置かれ、町の核としての機能は維持されていた。一国一城令により廃城となってしまった高岡城だが、利長の時代の高岡城の様子は、『高岡御城景台之絵図たかおかおんじょうけいだい の え ず（慶長17年（1612）8月写）』に見ることができる。明治維新後、城跡は払い下げの危機にあったが、明治6年（1873）の太政官布告第16号（公園条令）が布達されたことも追い風となり、高岡町民の公園指定運動によって、明治8年（1875）に「高岡公園」として指定され守られることとなった。

城内に建造物は全く残されていないが、キリシタン大名の高山右近たかやま う こんが設計したともいわれる優れた縄張りくわは非常によく残されており、郭や堀も当時とほとんど変わっていない。こうした点から、近世初頭の政治・軍事の状況や築城技術を知る上で貴重であると高く評価され、平成27年（2015）に史跡となった。また、現在は「さくらの名所100選（日本さくらの会選定）」や「日本100名城（日本城郭協会選定）」、「日本の歴史公園100選（都市公園法施行50周年等記念事業実行委員会選定）」などにも選ばれている。市民の憩いの場として、高岡万葉まつりなどのイベントの舞台として賑わいを見せており、高岡古城公園として市民に広く親しまれている。



高岡御城景台之絵図（慶長17年（1612）8月写）高岡市立中央図書館蔵 上下反転



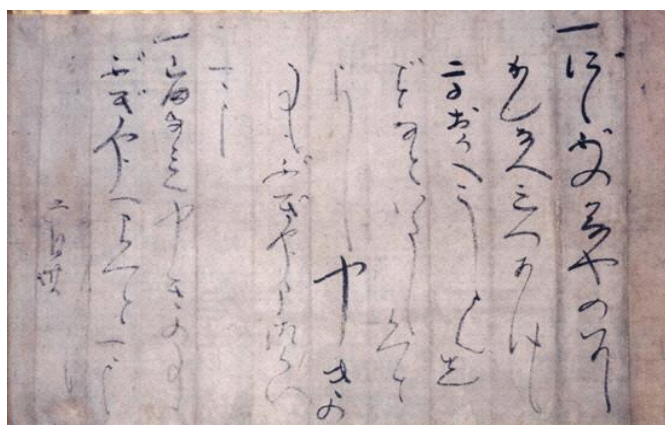
高岡古城公園案内図（令和2年（2020））

vii) 高岡のものづくり

本市は、高岡銅器や高岡漆器などの伝統産業と、アルミ産業などの近代産業が融合した商工業都市である。このものづくりの技術は、その多くが近世に端を発するものである。

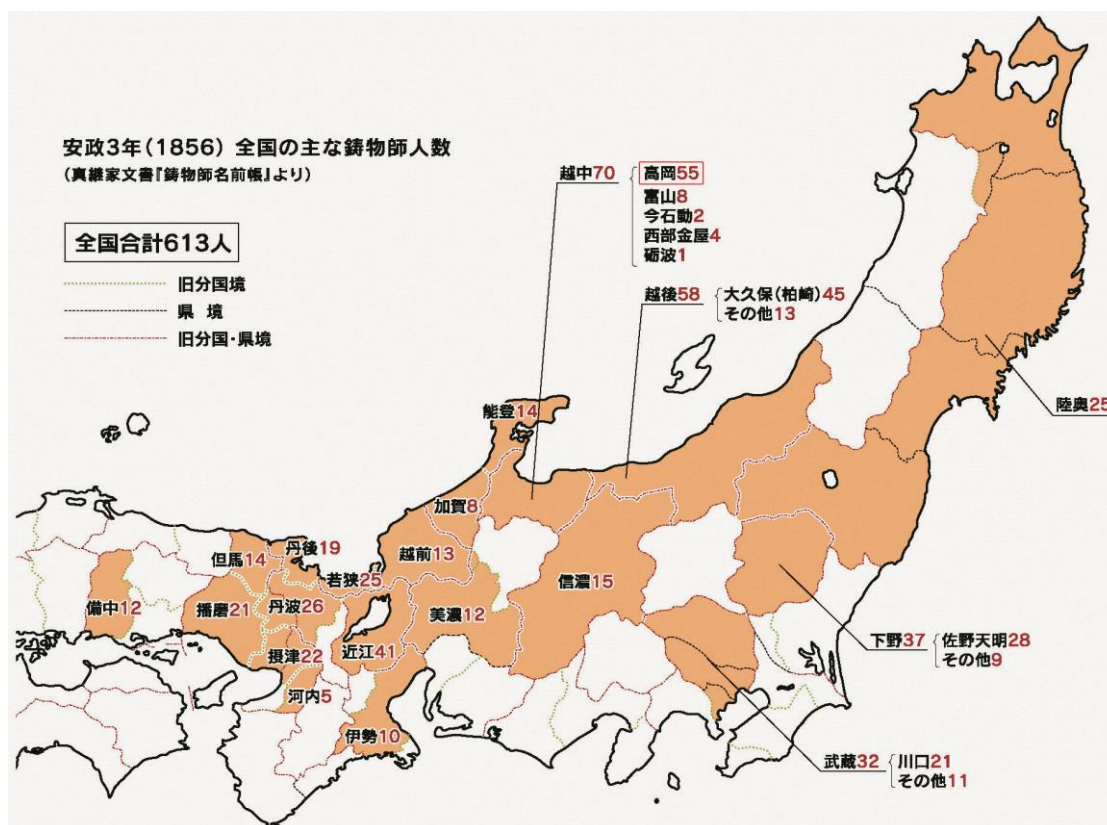
高岡銅器のはじまりは、およそ400年前に利長^{としなが}の高岡入城に際し、城下の繁栄を
図る産業政策の一環として始めさせた^と鑄物生産に見出すことができる。利長は、砺
波^{なみごおりにしぶ}郡西部金屋村^{かなやむら}（現在の高岡市戸出西部金屋）の鑄物師^{いもじ}に高岡へ移住して仕事を
するように指示を出し、金屋^{かなや}の地を与え、税や諸役の免除など手厚い保護をした。
これは、市指定有形文化財である『前田利長書状^{まえだとしながしよじょう}（慶長年間5月30日付）』から
も読み取ることができる。以降、金屋町^{かなやまち}を中心とした高岡の鑄物生産は、加賀藩の
庇護や町民らの努力により、大きな発展を遂げることとなった。

当初、高岡鑄物の生産は鍋や釜^{すきくわ}、鋤・鋤といった鉄鑄物の生産が大半で、銅鑄物
はわずかであった。これは18世紀初頭に高岡鑄物が能登^{のと}など越中国外へ販路を広
げ進出する機会を迎えても変わらず、当時の主要な生産品は塩釜やニシン釜などの
鉄鑄物であった。しかし、近世の早い段階から彫金師や仏具師により、装身具や仏
具、仏壇飾りなどの小物銅器もつくられており、18世紀後半になると、こうした
彫金師や仏具師の持つ技術と鑄物師^{いもじ}の技術が融合し、梵鐘^{ぼんしょう}や灯籠のような大型製
品から、火鉢や燭台などの日用品、かんざしやキセルなどの装飾品といった銅鑄物
がつくられるようになった。『鑄物師名前帳^{いもじなまえちょう}』によると、安政3年（1856）には越
中に70人の鑄物師^{いもじ}がいたが、そのうち55人は高岡の鑄物師であった。このことか
ら高岡で鑄物の生産が盛んであったことがわかる。また、製品を売りさばく高岡商
人の活躍もあって、高岡は銅器の一大生産地として発展することとなった。



前田利長書状（慶長年間5月30日付）

高岡市立博物館蔵



安政3年(1856) 全国の主な鋳物師人数(真継家文書『鋳物師名前帳』より)

[資料: 高岡市立博物館 常設展ガイドブック(平成20年(2008))]

18世紀後半に本格化し始めた高岡の銅器生産は、江戸時代後期にはさらに全国各地に販路を拡大し、19世紀中頃からは海外貿易も始まった。また近世には、一つの工房で鋳造から仕上げ、着色といった製造に関わる全ての工程を行う工房制手工業が行われてきたが、明治の中頃には、問屋が個々の職人に注文して商品を製造させる問屋制手工業体制が確立されていた。この頃の問屋は、単に商品を集めて各地に販売するだけでなく、人々の多様なニーズを研究し、その需要に基づいて製造業者に注文を出すなどの努力を続けており、これが高岡の金工技術の更なる進歩を促したと考えられる。さらに、明治維新によって金沢や富山の数多くの金工師(加賀^{ぞうがん}象嵌師)たちが、高岡銅器の隆盛を頼って高岡へ流入し、高岡銅器の質が格段に高められた。このように多くの名工を擁した高岡銅器は、明治期の万国博等に出品・入賞を重ねており、欧米への輸出が本格化するほどであった。第1回内国勸業博覧会に出品された『武人文大香炉(明治^{ぶじんもんだいこうろ}10年(1877)二代横山彌左衛門^{よこやま やざえもん})』は、市指定有形文化財となっている。



武人文大香炉(明治10年(1877)二代横山彌左衛門)
高岡市美術館蔵

今日でも高岡銅器の技術は非常に高い評価を受けており、昭和50年（1975）には国の伝統的工芸品の産地指定を受け、平成元年（1989）には金森映井智が「彫金」分野で、平成17年（2005）には大澤光民が「鑄金」分野で重要無形文化財（各個認定）保持者（いわゆる人間国宝）の認定を受けた。また、平成23年（2011）3月には「高岡鑄物の製作用具及び製品」が国の登録有形民俗文化財に登録された。



象嵌鑄銅花器（昭和59年（1984）
金森映井智）高岡市美術館蔵



鑄ぐるみ鑄銅花器（平成11年（1999）
大澤光民）高岡市美術館蔵

高岡漆器も、開町と同時に始まったといわれる。元禄から享保年間には、塗士屋八兵衛ら城端色漆蒔絵の名工を輩出し、江戸中期以降には、高岡工芸漆器の祖といわれる辻丹楓などの名工が次々と現れ、様々な技術を生み出した。また、幕末から明治期にかけて、石井勇助らの名工が現れ、勇助塗や青貝塗などの技法を編み出した。その後も、大正から昭和初期には組合が設立され、生産と販売の近代化が進められた。また、その技術は高く評価され、昭和50年（1975）には高岡銅器とともに国の伝統的工芸品の産地に指定された。

福岡町の菅笠づくりの起源は諸説あるが、古くは、室町時代の嘉吉年間（1441～1443）ともいわれており、庄川や小矢部川の氾濫による低湿地で自生した菅を利用した蓑作りから始まったと伝えられる。以降、山間を中心に水稻の不適作地を利用し菅を育て、小矢部川の河原や中州を利用して菅干しが行われてきた。江戸時代には加賀藩の奨励も受けて積極的に生産されるようになり、問屋の大型化や海や川、街道といった流通システムの有効利用により、「加賀の菅笠」として全国へ販路を拡大した。また、その技術や菅の生産から菅笠の製作までの全工程をこの地域で行っていることが高く評価され、平成21年（2009）には「越中福岡の菅笠製作技術」として



福寿文勇助塗飾棚（明治14年
（1881）二代石井勇助）高岡市
美術館蔵

重要無形民俗文化財に指定された。平成29年（2017）には「越中福岡の菅笠」^{えっちゅうふくおか すげがさ}として国の伝統的工芸品にも指定された。

④近代

i) 商工業都市高岡の隆盛

近代は、高岡が更に大きな発展を遂げた時期である。明治期に入っても、越中における最も重要な産業は米作であった。当地で収穫された米の半分は地元で消費されたが、残りは北海道や東京、京都、大阪に廻米されていた。この廻米を扱っていたのが高岡の米商人であり、その運搬にあたったのが廻船問屋である。

高岡では、明治18年（1885）、それまで金沢にしか設置が認められていなかった米商会所が開業し、豊かな穀倉地帯である砺波平野^{と なみ}を後背地とする高岡の米取引が活発化していった。それに伴い、江戸時代から続く山町筋^{やまちょうすじ}の菅野家^{すが の}を中心とする大商人や、伏木^{ふし き}では藤井家^{ふじの}、堀田家^{ほった}などの廻船問屋が隆盛を競うように更なる発展を遂げることとなった。彼らは綿や布、肥料などを扱う会社を次々と興した。明治22年（1889）以降、菅野伝右衛門^{すが の だん えもん}など山町筋^{やまちょうすじ}の豪商を中心とした銀行の設立、明治26年（1893）の日本海側初の紡績工場となる高岡紡績株式会社の設立、明治36年（1903）には高岡電燈株式会社の設立など、近代産業への転換をいち早く果たした。さらには、明治31年（1898）の民営中越鉄道^{ちゅうえつてつどう}の開通、同31年（1898）から同32年（1899）の官設北陸鉄道^{ほくりくてつどう}の開通、明治32年（1899）の伏木港^{ふしきこう}の開港場指定など、流通システムの整備も図られ、これが高岡の商業能力の強化に大きな役割を果たした。



高岡米穀取引所（『富山県写真帖』
富山県編（明治42年（1909）より）

この発展は、中心市街地で収まるものではなく、近代化の波は周辺域へも拡大した。伏木港^{ふしきこう}では、明治41年（1908）に県内初の化学工場である北陸人造肥料株式会社商業港^{ほくりくじんぞう ひりょう}が設立され、その後も北海曹達株式会社や伏木製紙株式会社など金属・化学・製紙工場などが次々と進出し、北陸で最初の臨海工業地帯が生まれた。古くから八講布^{はっこうふ}と称する麻布の産地として有名であった戸出^{といで}では、明治期に入るととりわけ綿織物が隆盛になり、明治26年（1893）に戸出物産合資会社が設立された。

教育の分野では、産業・経済分野からの要求に応えるかたちで、明治27年（1894）の富山県工芸学校の設置を機に次々と中等学校が設置された。また、大正11年（1922）には上水道の敷設が初めて提案され、昭和6年（1931）6月に市内主要部の工事が完成し通水が始まるなど、社会資本の整備も図られ、経済的豊かさと並行して人々の生活も豊かになっていった。

ii) 伏木港の近代化と藤井能三

重要港湾を有する伏木の発展は、民間の活力が生かされたものであった。伏木の有力な廻船問屋に生を受けた藤井能三は、明治5年（1872）に発布された学制を機に伏木に学校を開くことを決意、自らの持家を提供し設立に要する費用をすべて立て替えて、県下初の公立小学校である伏木小学校、同9年（1876）には藤井女兒小学校を開校した（両校は同20年（1887）に伏木小学校に統合）。また、港湾については、明治8年（1875）に大型汽船の伏木来港を実現させ、同10年（1877）には私費を投じて日本海側で最初となる西洋式灯台を完成させた。藤井能三は、私財を投げ打って伏木と伏木港の発展と近代化を推し進めた者として、今でも市民の尊敬を集める先人の一人である。

iii) ものづくりの技を活かした近代産業の発達

近代以降、近世から発達したものづくり技術を活かして、科学や産業が発達した。

科学の分野では、アドレナリンの発見と消化剤タカジアスターゼの発明で世界的に有名な高峰讓吉を輩出している。高峰讓吉はこれらの発見・発明のほか、わが国におけるプラスチック工業の草分け的存在であるとともに、富山県の急流河川に着目し、河川の水力による低廉な電力を利用したアルミニウム工業の起業に乗り出すなど、高岡の近代化を科学の分野で支えた偉人である。現在の本市の主要な近代産業であるアルミニウム工業は、近世初頭に始まる鋳物の伝統技術と高峰讓吉らの科学分野が融合して発展したものであると言える。

⑤現代

第2次世界大戦終戦後、本市は、戦災により比較的大きな被害を受けなかったことから、中心市街地には主要な公共・文化施設や商業地が集中し、非戦災都市として今日まで歩んでいる。一方で、近世末期の町家や明治期の大火後に建てられた土蔵造りの町家、近代商業の隆盛を今に伝える優れた洋風建築等、風情ある町並みが随所に残っている。数多くの歴史・文化資産が集積し、高岡開町時の町立ての雰囲気の色濃く残っている地は全国においても稀有な状況であることが言えるとともに、古くからの文化が受け継がれ、個性と創造性に富んだ市民性が育まれることによる教育環境を通して、高い技術と豊かな才能を持った多くの人材が育つことに対する期待が高まっている。

（2）ゆかりの人物

本市の歴史的風致の形成に関わりのある人物のうち、本計画の歴史的風致に記載のある代表的な人物を以下に挙げる。

①大伴家持^{おおとものかもち}（718～785）

奈良時代の歌人。『万葉集』の代表歌人でその編者。

天平18年（746）に越中^{えっちゅうのかみ}守に任じられ、天平勝宝3年（751）に帰京するまでの5年間、越中国に在任した。在任中に当地の風光明媚な自然などについて数多くの秀歌を詠んでいる。また、仏教による鎮護国家を進めるため、東大寺の荘園の占定、国分寺・国分尼寺の建立を促進する任務を担っていた。

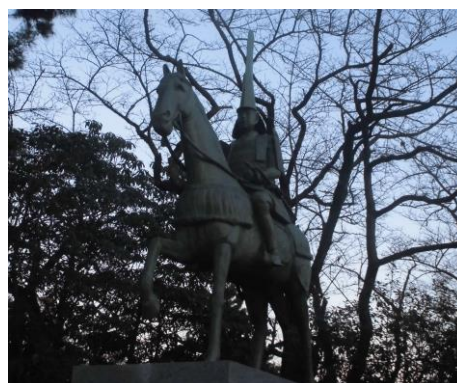


大伴家持像

②前田利長^{まえだとしなが}（1562～1614）

加賀前田家2代当主。初名は利勝^{としかつ}。

天正13年（1585）、豊臣秀吉より砺波^{とよなみ}・射水^{いみず}・婦負^ねの3郡を与えられ、守山城主となり城下に町を築いたが、慶長2年（1597）に富山城へと居城を移した。その後、弟の利常^{としつね}へ家督を譲り隠居していたが、富山城焼失を契機に慶長14年（1609）に高岡城と城下町を築いた「高岡の祖」である。



前田利長像

③前田利常^{まえだとしつね}（1594～1658）

加賀前田家3代当主。初名は利光^{としみつ}。利長の異母弟にあたる。

利長^{としなが}の死と元和元年（1615）の一国一城令による高岡城廃城後、様々な商工振興策を進め、高岡の商工業都市への転換策を積極的に図った。



前田利常像

（石川県小松市より提供）

4 文化財等の分布状況

本市における文化財の指定件数は下記の表のとおりである。

		国		県	市
種類		国宝	指定・選定	指定	指定
有形文化財	建造物	2	6	1	5
	絵画		2	1	4
	彫刻		2	5	12
	工芸品		2	4	19
	書跡・典籍・古文書		1	2	17
	考古資料				4
	歴史資料			3	
無形文化財			1		1
民俗文化財	有形の民俗文化財		1		2
	無形の民俗文化財		2	1	2
記念物	遺跡		3	4	14
	名勝地		1		1
	動物・植物・地質鉱物			2	10
重要伝統的建造物群保存地区			3		
計		2	24	23	91

登録有形文化財	39 棟（19 件）
登録有形民俗文化財	1

文化財の指定・選定件数（令和5年（2023）1月1日時点）

（1）国指定・選定文化財

市内には重要文化財に指定された建造物が8件あり、そのうち2件は国宝である。また、絵画や彫刻、工芸品等の重要文化財が7件あるほか、1件の重要無形文化財、1件の重要有形民俗文化財、2件の重要無形民俗文化財、3件の史跡、1件の名勝がある。重要伝統的建造物群保存地区も3地区選定されており、指定文化財の種類は多岐にわたっている。

以下に建造物等の主だった文化財をまとめた。なお、★については第2章で詳細に説明する。

①建造物

i) 国宝（2件）

名称	ずいりゅうじ ★ 瑞龍寺★		
	ぶつでん (仏殿)	はつどう (法堂)	さんもん (山門)
外観			
所在地	せきほんまち 高岡市関本町	せきほんまち 高岡市関本町	せきほんまち 高岡市関本町
年代	万治2年（1659）	明暦元年（1655）	文政元年（1818）
概要（構造など）	桁行3間、梁間3間、一重、もこし付、入母屋造り、鉛瓦葺。	桁行11間、梁間9間、一重、入母屋造り、銅板葺、向拝桁行2間、梁間1間、一重、向唐破風造り、銅板葺。	三間一戸二重門、入母屋造り、こけら葺、左右山廊付 各桁行3間、梁間1間、一重、切妻造り、こけら葺。
名称	しょうきんじ ★ 勝興寺★		
	(本堂)	(大広間及び式台)	
外観			
所在地	ふしきふるこくふ 高岡市伏木古国府	ふしきふるこくふ 高岡市伏木古国府	
年代	寛政7年（1795）	大広間 17世紀中期（推定）	式台 18世紀後半（推定）
概要（構造など）	桁行39.3m、梁間37.5m、高さ23.5m、一重、入母屋造り、向拝三間、亜鉛合金板葺	桁行18.5m、梁間15.8m、高さ10.4m、一重、正面入母屋造り、背面切妻造、北面及び南面庇付、こけら葺、背面下屋及び南面渡り廊下付属、板葺	桁行16.5m、梁間19.5m、高さ10.9m、一重、正面入母屋造、背面切妻造、正面起り破風玄関及び二口脇玄関、北面庇付属、背面台所に接続、大広間・式台間を切妻屋根で繋ぐ、こけら葺

ii) 重要文化財（6件）

名称	ずいりゅうじ 瑞龍寺★ (そうもん ぜんどう だいさどう たか 総門、禅堂、大茶堂、高 ろうか かいろう かいろう 廊下、北回廊、南東回廊、 かいろう 南西回廊)	け た じんじゃほんでん 氣多神社本殿★	たけ だ け じゅうたく 武田家住宅★
外観			
所在地	せきほんまち 高岡市関本町	ふし き いちのみや 高岡市伏木一宮	おお た 高岡市太田4258番地
年代	そうもん 総門：明暦頃(1655-1657 頃)	室町時代後期(1467~1572)	寛政時代(1789~1800)
概要(構造など)	総門は、三間一戸薬医門、 きりづまづく ぶき 切妻造り、こけら葺、左右 そでかべ 袖壁附属。	さんげんしやながれづく こうはい 三間社流造り、向拝1間、 ぶき こけら葺。	桁行 21.2m、梁間 20.6m、一 よせむねづく こし 部2階、寄棟造り、背面腰 おれ かや ぶき 折屋根、茅及びこけら葺、 ひさし 西面、南面及び東面庇付、 さんがわらぶき 南面便所附属、棧瓦葺、 ひさし いたぶき 北面庇附属、板葺。
名称	さ え き け じゅうたく 佐伯家住宅	しょうこうじ 勝興寺★ (きやうどう ごりやう や こどう 経堂、御霊屋、鼓堂、 ほうぞう そうもん からもん しきだいもん 宝蔵、総門、唐門、式台門、 だいどころ しょういん おくしょういん お 台所、書院及び奥書院、御 ないぶつ 内仏)	すがの け じゅうたく 菅野家住宅★ (しゅおく どうぞう 主屋、土蔵)
外観			
所在地	ふくおかまちのじま 高岡市福岡町蓑島630	ふし き ふるこくふ 高岡市伏木古国府	き ふねまち 高岡市木舟町36番1号
年代	明和4年(1767)	からもん 唐門：明和6年(1769)	しゅおく 主屋：明治33年(1900)
概要(構造など)	桁行 18.0m、梁間 13.0m、入 も やづく ひさし 母屋造り、東面庇付、 かやぶき げ や さんがわら 茅葺、背面下屋付、棧瓦 ぶき 葺。	唐門は、四脚門、切妻造・前 後唐破風造・檜皮葺	土蔵造り、建築面積 288.45 ㎡、2階建て、さんがわらぶき 背面西方浴室及び便所附 属。

②無形文化財（1件）

重要無形文化財として、「^{ちゅうきん}鑄金」（各認定保持者（いわゆる人間国宝）として、^{おおざわゆきまさ}大澤幸勝（雅号「^{おおざわこうみん}大澤光民」）が認定）が指定されている。

③無形民俗文化財（2件）

重要無形民俗文化財として、「^{たかおか みくろまやまつり}高岡御車山祭の御車山行事」や「^{えつちゅうふくおか すげ}越中福岡の菅笠製作技術」が指定されている。「^{たかおか みくろまやまつり}高岡御車山祭の御車山行事」は「^{やま ほこ やたい}山・鉾・屋台行事」として平成28年（2016）にユネスコ無形文化遺産に登録された。

④史跡（3件）

名称	^{さくらだにこふん} 桜谷古墳	^{か がはんしゆまえ だ け ぼしよ} 加賀藩主前田家墓所 ^{まえ だ としなが ぼしよ} （前田利長墓所）★	^{たかおかじょうあと} 高岡城跡★
外観			
所在地	^{おおた} 高岡市太田	金沢市、高岡市	^{こじょう} 高岡市古城
年代	古墳時代前期	正保3年（1646）	慶長14年（1609）
概要（構造など）	1号墳・2号墳で構成されている。1号墳は全長62m、2号墳は全長50mを測る。2号墳の後円部からは、 ^{いしくしろ くだたま} 石釧や菅玉、鏡の破片も出土している。	^{まえ だ としなが ぼしよ} 前田利長墓所は、一辺約180mの正方形区画で、大名個人墓として全国最大級の規模を誇る。二重の堀で囲まれ、中心には、戸室石（安山岩）で化粧した二重基壇上に笠塔婆型墓碑が立つ。近世の大名権力や墓制を知る上で貴重。	本丸の周囲に二重の ^{うまだし} 馬出郭を配し、郭の周囲に堀を巡らした特徴的な城郭遺構が良好に残る。近世初頭の政治・軍事の状況や築城技術を知る上で貴重。

⑤重要伝統的建造物群保存地区（3件）

i) 山町筋^{やまちょうすじ}伝統的建造物群保存地区

面積：約 5.5ha

範囲：守山町^{もりやままち}・小馬出町^{こんまだしまち}の各全域、及び御馬出町^{おんまだしまち}・木舟町^{きふねまち}・一番町^{いちばんまち}・源平町^{げんぺいちょう}・本町^{ほんまち}の各一部

概要：山町筋^{やまちょうすじ}は、江戸期の初めに成立した城下町の骨格を踏襲しながら、明治33年（1900）の大火後に当時の防災計画に従って再興された町で、土蔵造りや真壁造りの町家、前面を洋風に仕上げた町家、レンガ造りの銀行建築など、明治中期から、大正、昭和初期に建築された伝統的な建造物が残る地区である。



山町筋の町並み

ii) 金屋町^{かなやまち}伝統的建造物群保存地区

面積：約 6.4ha

範囲：金屋町^{かなやまち}・金屋本町^{かなやほんまち}の各一部

概要：金屋町^{かなやまち}は、利長^{としなが}が城下建設に際し、鑄物師^{いもじ}を招き土地を与えて鑄物づくりを行わせた高岡鑄物発祥の地である。利長が町民に与えた拝領地は、長さ100間（約180m）・幅50間であったが、現在では長さ約600mの範囲に、木造・2階建て・真壁造り・登り梁形式の町家や土蔵、近代以降の工場跡などが100棟以上残されており、鑄物師町^{いもじまち}としての風情を形づくっている。また、明治期以降に建てられ、軒が深く、袖壁があり、サマノコと呼ばれる格子を建て込んだ真壁造りの町家が多く残る地区である。



金屋町の町並み

iii) 吉久^{よしひさ}伝統的建造物群保存地区

面積：約 4.1ha

範囲：高岡市吉久^{よしひさ}二丁目・三丁目の各一部

概要：吉久は、小矢部川^{おやべがわ}を挟んで伏木^{ふしき}の対岸に位置する地で、早くから伏木港^{ふしきこう}の玄関口として発展したところである。江戸時代には藩の米蔵が置かれ、砺波・射水^{いみず}両平野の米の集散地として大きな役割を果たし、米蔵が失われた明治以降は、米穀売買や倉庫業を中心に栄えた。町並みは、かつての放生^{ほうじょうづ}津街道沿いを中心に形成され、木造・2階建て・真壁造り・登り梁形式の伝統的な町家が建ち並び、かつての町の繁栄^{しの}を偲ばせる。玄関奥にオイと呼ばれる上部が吹き抜けの部屋があり、2階正面はアマと呼ばれる稲わら等の収納空間とし、壁面には窓がない吉久特有の表構えの町家が残る地区である。



吉久の町並み

（2）県指定文化財

建造物が1件あり、絵画や彫刻、工芸品等が15件ある。また、「二上射水神社の築山行事」が無形民俗文化財として登録されているほか、4件の史跡、2件の天然記念物がある。

建造物と史跡については以下にまとめた。なお、★については第2章で詳細に説明する。

名称	いかに けいゆうたく 筏井家住宅★	じょう ひらよこあな こふん 城が平横穴古墳	えっちゅうこくぶん じ あと 越中国分寺跡★
外観			
所在地	き ふねまち 高岡市木舟町	ふくおかまちまいの や ばん ば 高岡市福岡町 舞谷・馬場内	ふし き いちのみや 高岡市伏木 一宮1-1-44
年代	明治36年（1903）	古代	天平20年頃（748）頃
概要（構造など）	桁行6間半、梁間7間半、切妻造り、平入り、 きりづまづく ひらい さんがわらぶき 棧瓦葺、2階建て、黒 しっくい 漆喰仕上げ。	じょう が ひらやま 城ヶ平山（標高173.6m）の東 山腹にあり、まいの や ばん ば 馬場側に9基確認。副葬品の てつせいぎんぞうがんかぶつちのつかがしら 鉄製銀象嵌頭 椎柄頭 は県内 唯一。	昭和41年（1966）に発掘調査 が実施され、建物の基礎工事 の痕跡が確認されるとともに こくぶんじ 国分寺に葺かれた瓦や当時使 用された食器等が出土した。
名称	き ふねじょうあと 木舟城跡	ずいりゅう じ せきびょう 瑞龍寺の石廟	
外観			
所在地	ふくおかまち き ふね 高岡市福岡町木舟地内	せきほんまち 高岡市関本町35	
年代	寿永3年頃（1184）頃	近世	
概要（構造など）	16世紀代を中心とする 土遺物が出土。地滑りの 痕跡が検出され、大地震 の影響を受けたことが わかる。	せきびょう 石廟は5基、せきどう きりづまづく 石堂は切妻造 り、堂内にほうきょういんとう 宝篋印塔を安置。 まえ だ としなが としいえ お だ 右から前田利長・利家・織田 のぶなが のぶなが のぶただ 信長・信長夫人・信忠。	

（3）市指定文化財

5 件の建造物、56 件の絵画や彫刻、工芸品等がある。また、無形文化財として福岡の「雅楽」が指定を受けており、そのほか2 件の有形民俗文化財、2 件の無形民俗文化財、古墳や中世城館跡など 14 件の史跡があり、福岡地区の西山丘陵を中心に1 件の名勝、10 件の天然記念物がある。

以下に建造物についてまとめた。なお、★については第2 章で詳細に説明する。

名称	といで お た や もん 戸出御旅屋の門	ご ふくまちしんめいしやほんでん 五福町神明社本殿★	おお て まちしんめいしやはいでん 大手町神明社拝殿★
外観			
所在地	高岡市戸出町2-14-20	高岡市五福町12-50	高岡市大手町8-14
年代	寛永 19 年（1642）	慶安 5 年（1652）	慶安 5 年（1652）
概要（構造など）	桁行 4 間、梁間 2 間、 きりづまづく さんがわらぶき 切妻造り、棧瓦葺。	間口 3 間、奥行 2 間の入 も やづく ひらい さんがわらぶき 母屋造り、平入り、棧瓦葺 （元こけら葺）。	間口 3 間、奥行 1 間の入母屋 づく ひらい さんがわらぶき 造り、平入り、棧瓦葺（元 こけら葺）。
名称	きゅうあきもと け じゅうたく 旧 秋元家住宅★	きゅうむるさき け じゅうたく 旧 室崎家住宅★	
外観			
所在地	高岡市伏木古国府7-49	高岡市小馬出町26-1	
年代	明治 20 年頃（1887）	明治 36 年頃（1903）	
概要（構造など）	高岡市伏木北前船資料 館。 しゅおく きりづまづく つまい 主屋は切妻造り、妻入 り、棧瓦葺。 さんがわらぶき	高岡市土蔵造りのまち資料 館。桁行 4 間、梁間 7 間、 きりづまづく ひらい さんがわらぶき 切妻造り、平入り、棧瓦葺、 2 階建て。	

（４）国の登録文化財

市内には登録有形文化財である建造物が39棟（19件）あり、また、登録有形民俗文化財が1件ある。

以下に建造物についてまとめた。なお、★については第2章で詳細に説明する。

名称	たかおかしょうこうかい ぎ しょ 高岡商工会議所 ふし き し しょ 伏木支所★	し みずまちはいすいと う し りょうかん 清水町配水塔資料館	さわ だ け じゅうたく しゅおく 澤田家住宅（主屋）
外観			
所在地	ふし き みなとまち 高岡市伏木 湊町7-1	し みずまち 高岡市清水町1-7-30	ふたづか 高岡市二塚10
年代	明治43年（1910）	旧配水塔：昭和6年（1931）	大正初期（1912～1925）
概要（構造など）	ふし き 旧伏木銀行。木造2階建て、 かわらぶき、建築面積261㎡。	旧配水塔・水源地水槽・第三源井 だいさんげんせい うわ や 上屋で構成。旧配水塔は、鉄筋 コンクリート造、高さ29.7m、 直径11.4m。	木造2階建て、 かわらぶき、 建築面積220㎡。
名称	たな だ け じゅうたく★ 棚田家住宅★	ふくおかまちれき し みんぞく し りょうかん 福岡町歴史民俗資料館	たにむら け じゅうたく しゅおく★ 谷村家住宅（主屋）★
外観			
所在地	ふし き にしきまち 高岡市伏木 錦町14-26	ふくおかまちしもむく た 高岡市福岡町下向田15	ふし き ちゅうおうまち 高岡市伏木 中央町1-6
年代	しゅおく 主屋：明治23年頃（1890）	大正13年（1924）	明治元年（1868）
概要（構造など）	しゅおく み そぐら どうぐぐら い 主屋・味噌蔵・道具蔵・衣 しょうぐら 装蔵で構成。木造2階建て、 かわらぶき、 瓦葺、建築面積408㎡。	ふくおかまち 旧福岡町役場。鉄筋コンクリート造2階建て、 かわらぶき、 瓦葺、建築面積265㎡。	木造2階建て、 かわらぶき、 建築面積86㎡。

名称	のうまつけ じゅうたく しゅおく 能松家住宅（主屋）★	さの け じゅうたく 佐野家住宅★	いなみ や ぶつだんてん 井波屋仏壇店★
外観			
所在地	よしひさ 高岡市吉久2-3-2	おんまだしまち 高岡市御馬出町68	もりやままち 高岡市守山町37-1
年代	明治末期頃（1868～1911）	明治33年（1900）	明治38年（1905）
概要（構造など）	木造2階建て、瓦葺、 建築面積 101 m ² 。	しゅおく ちゃしつ 主屋・茶室・一番の蔵・二番の蔵・調度蔵・味噌蔵・防火壁で構成。土蔵造り2階建て、瓦葺、 建築面積 112 m ² 。	木造2階建て、瓦葺、 建築面積 96 m ² 。
名称	ありとう け じゅうたく 有藤家住宅★	きよ と しゅどうじょうしゅおく 清都酒造場主屋★	きゅうなん ぶ ちゅうどうしよ 旧南部鑄造所★
外観			
所在地	よしひさ 高岡市吉久2-3-13	きょうまち 高岡市京町12-12	かな や ほんまち 高岡市金屋本町3-45
年代	大正5年（1916）	明治20年頃（1887）	大正13年（1924）
概要（構造など）	木造2階建て、瓦葺、 建築面積 195 m ² 。	木造2階建て、瓦葺、 建築面積 176 m ² 。	キューボラ・煙突で構成。 キューボラは鉄製キューボラ及びレンガ・石造煙道よりなる、鉄製吸気管付。 煙突はレンガ造り、高さ15m。

名称	きゅうふし き そつこうじょ 旧 伏木測候所★	あり そ しょうはちまんぐう 有儀 正 八幡宮★	いとう け じゅうたく 伊東家 住宅 きゅうまつした け じゅうたく (旧 松下家 住宅)
外観			
所在地	ふし き ふるこく ふ 高岡市伏木古国府12-5	よこ た まち 高岡市横田町3-1-1	なか だ あざ きむら 高岡市中田字木村4760
年代	ちょうしや 庁舎：明治42年（1909） そくふうとう 測風塔：昭和13年（1938）	ほんでん 本殿：明治16年（1883）	昭和5年（1930）
概要（構造など）	高岡市伏木気象資料館。 ちょうしや そくふうとう 庁舎と測風塔があり、庁舎は木造平屋建て、かわらぶき 葺、建築面積154㎡。 そくふうとう 測風塔は鉄筋コンクリート造3階建て、建築面積13㎡。	ほんでん つりどの はいでん へいでん 本殿・釣殿・拝殿及び幣殿があり、本殿は木造平屋建て、 ほんでん 銅板葺、建築面積21㎡。	木造2階建て、かわらぶき 瓦葺、建築面積179㎡。
名称	わかい け じゅうたく しゅおく 若井家 住宅（主屋） ちゅうえつ (旧中越銀行) ★	まる や け じゅうたく 丸谷家 住宅 きゅうつ の け じゅうたく (旧津野家 住宅) ★	かなさく け じゅうたく 金作家 住宅★
外観			
所在地	かわらまち 高岡市川原町65-6	よしひさ 高岡市吉久2-2618	ないめん 高岡市内免1-53 他
年代	明治35年（1902）、大正7年（1908）移築	しゅおく 主屋：明治中期（1883～1897）、大正期増築（1912～1926）	しゅおく 主屋：明治26年（1893）
概要（構造など）	木造2階建て、かわらぶき 瓦葺、建築面積139㎡。	しゅおく 土蔵がある。主屋は しゅおく 木造平屋一部2階建て、かわら ぶき 瓦葺、建築面積143㎡。	しゅおく 東土蔵・西土蔵があり、主屋は木造2階建て、 しゅおく かわらぶき 瓦葺、建築面積124㎡。

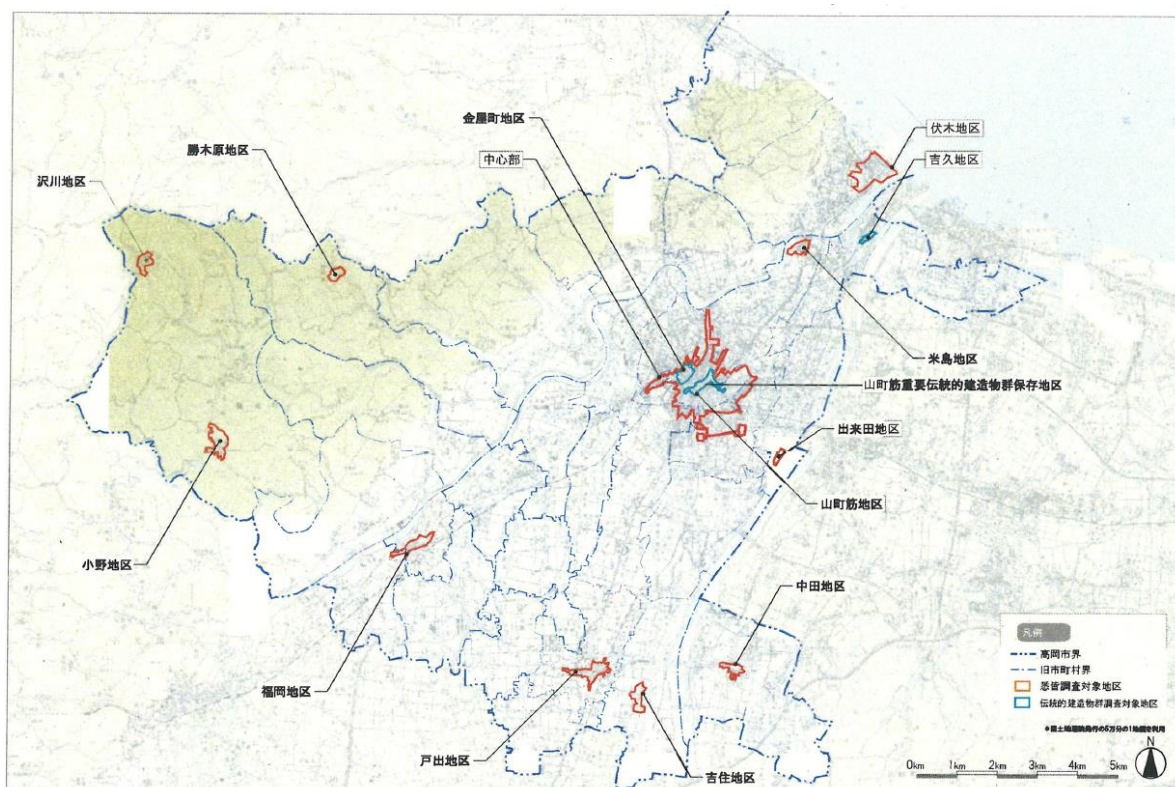
名称	かんせいじ 歓盛寺		
外観			
所在地	ふたづか 高岡市二塚1316		
年代	ほんどう 本堂：江戸中期(1661～1751) ／明治18年(1885)・同39年 (1906)・平成13年(2001)改修		
概要（構造 など）	ほんどう はなれ ざしき さんもん 本堂・離座敷・山門があり、 ほんどう 本堂は木造平屋建て、かわらぶき 瓦葺、 建築面積 308 m ² 。		

（５）主な未指定文化財

指定等以外の文化財の分布状況については、平成20年度（2008年度）から平成22年度（2010年度）に実施した「高岡市文化財総合的把握モデル事業」（文化庁委託事業）において、市内文化財悉皆的調査を実施し把握した。

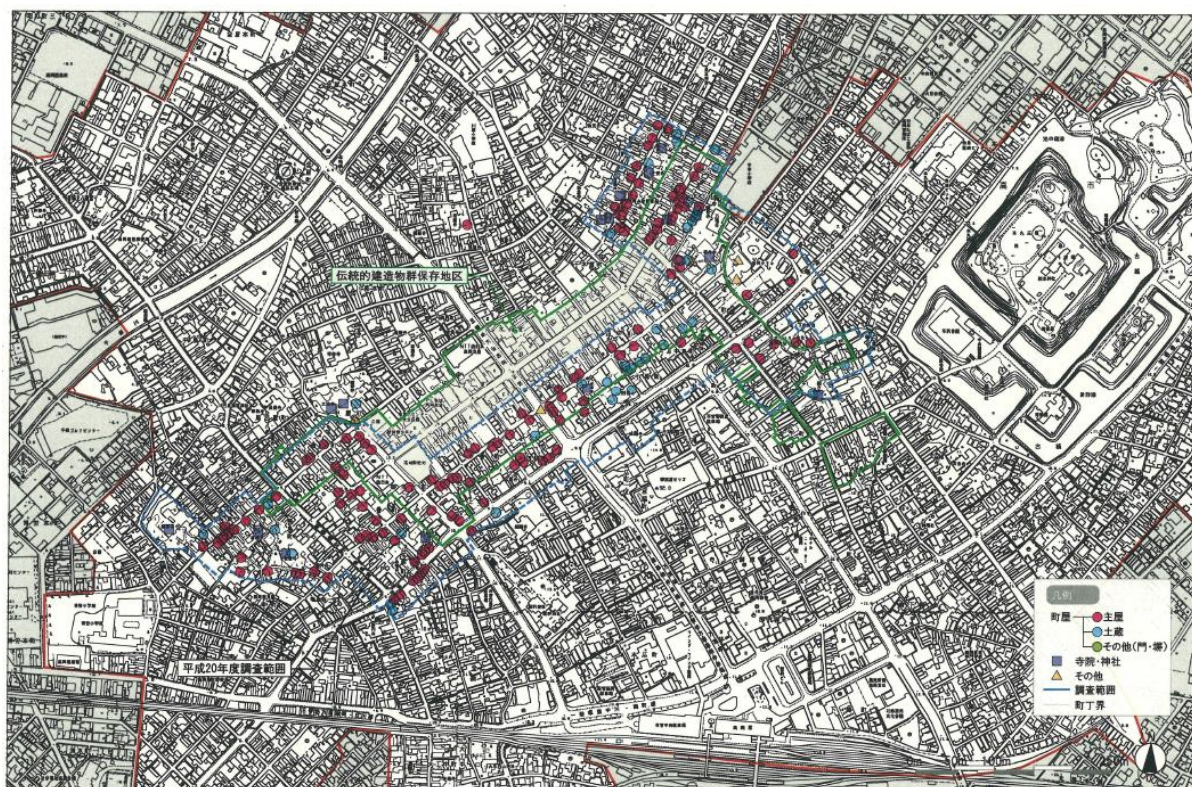
①伝統的建造物

伝統的建造物の調査に関しては、伝統的建造物の建築時期や立地特性を踏まえ、「町家」、「農家一散村・集村集落、山村集落」に分けて調査を実施した。調査地区については、上記伝統的建造物の集積度の高いと思われる地区を抽出しており、町家については中心市街地・伏木・福岡・戸出・中田を抽出した。農家のうち散村・集村集落については戸出（吉住）・出来田・米島を、山村集落については、勝木原・福岡（沢川、小野）を抽出した。調査の対象とする伝統的建造物の建築年代は江戸時代から昭和初期（戦前）までとした。



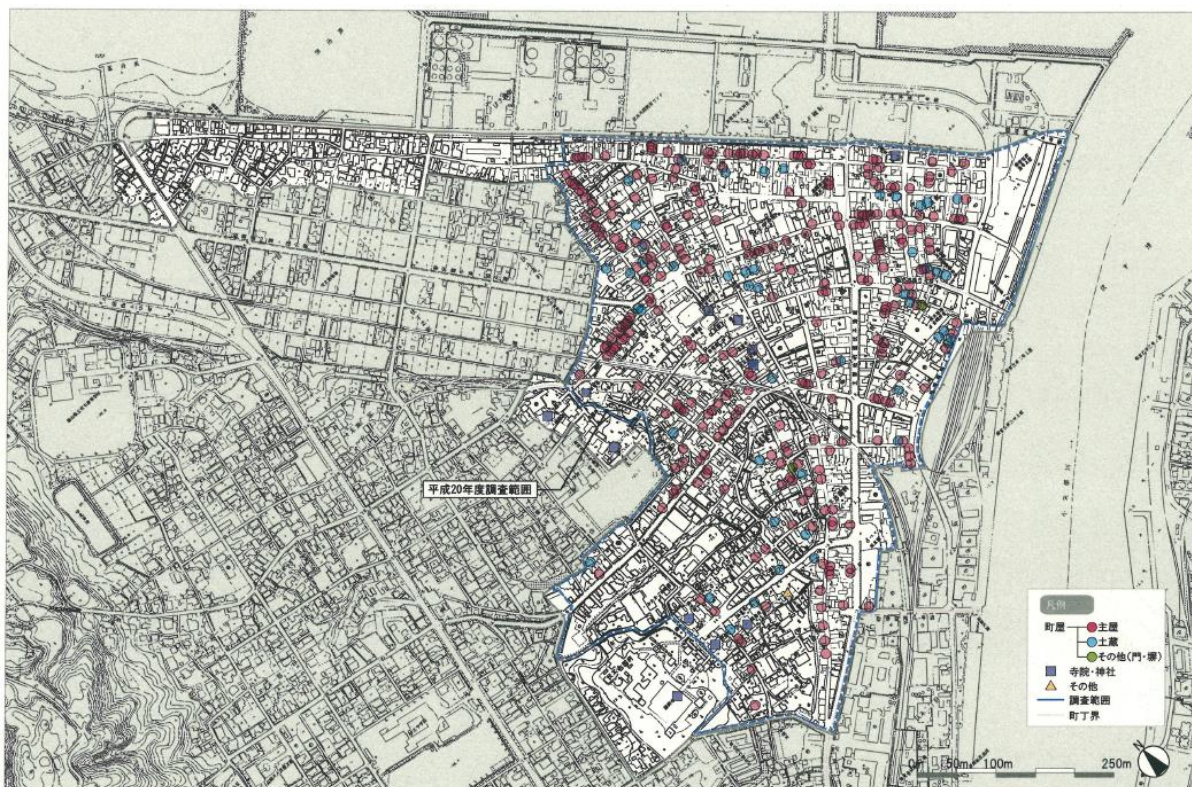
有形文化財（伝統的建造物）悉皆調査対象地区

[資料：高岡市歴史文化基本構想（平成23年（2011）3月）]



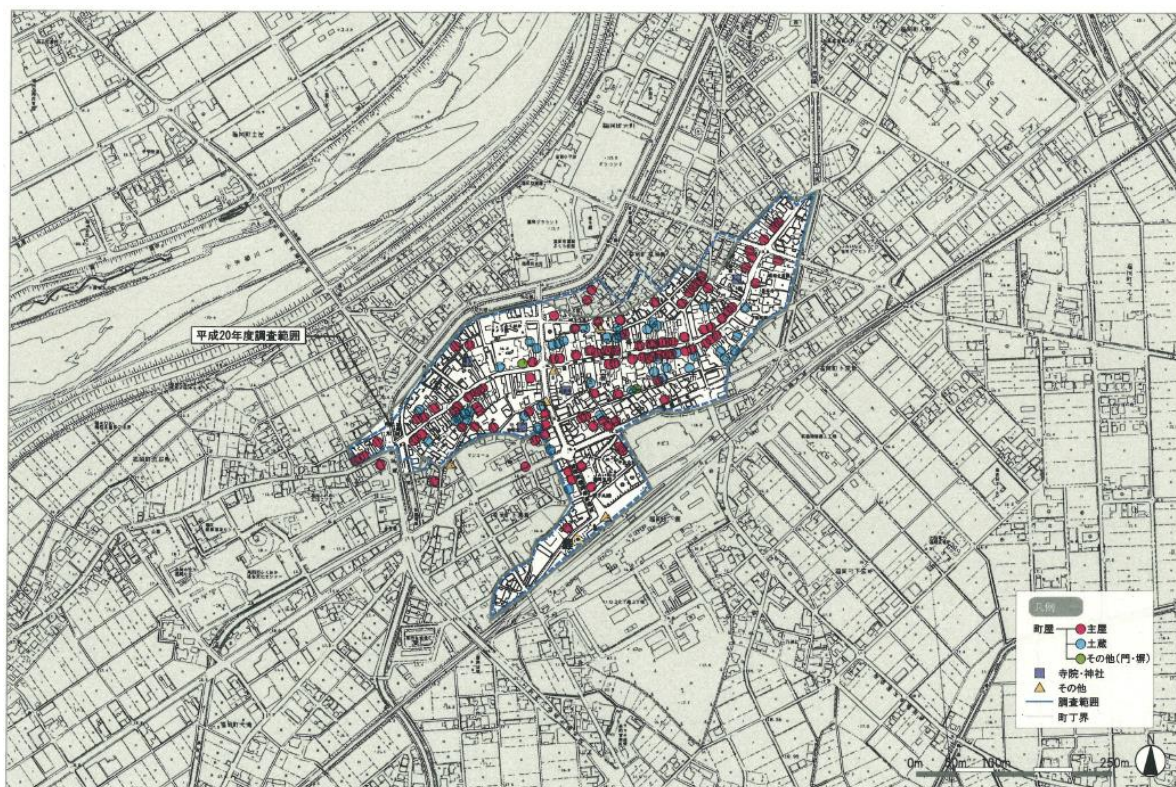
伝統的建造物種類別分布（山町筋地区）

[資料：高岡市歴史文化基本構想（平成23年（2011）3月）]



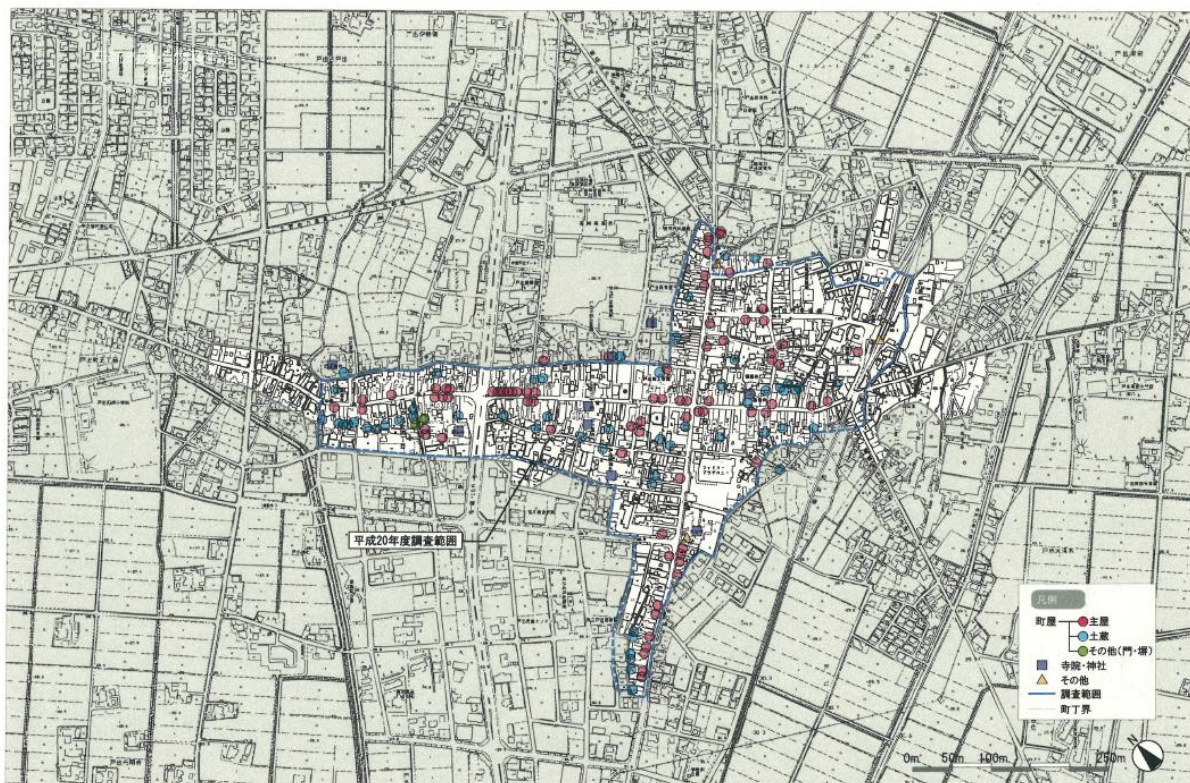
伝統的建造物種類別分布（伏木地区）

[資料：高岡市歴史文化基本構想（平成23年（2011）3月）]



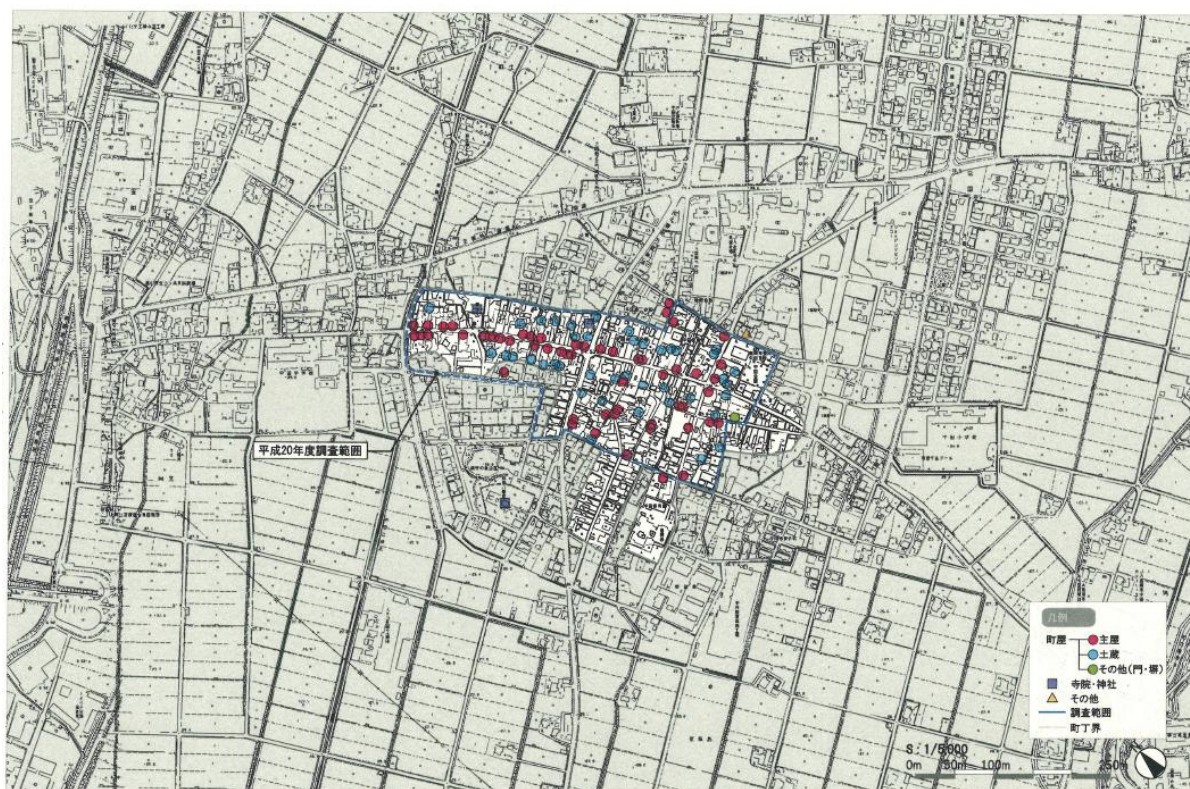
伝統的建造物種類別分布（福岡地区）

[資料：高岡市歴史文化基本構想（平成23年（2011）3月）]



伝統的建造物種類別分布（戸出地区）

[資料：高岡市歴史文化基本構想（平成23年（2011）3月）]



伝統的建造物種類別分布（中田地区）

[資料：高岡市歴史文化基本構想（平成23年（2011）3月）]

市内文化財^{しつかい}的調査の結果、伝統的建造物については「町家」、「農家」それぞれに次のような特徴があることがわかった。また、社寺建築については、昭和 55 年度（1980 年度）に富山県によって近世社寺建築の調査が実施されており、市内でも比較的価値の高い社寺建築の把握が完了している。

i) 町家

市内の町家は大正から戦前に建てられたものが多い。明治のものもある程度見られるが、近世まで遡るものは少ない。

町家は木造真壁造りのものと土蔵造りのもの、看板建築とに大別できる。このうち木造真壁造りのものは、中二階下屋庇付き建物においては下屋庇が板葺であり傷みやすいことから、大屋根を深く出すために出桁造りのものがほとんどである。なお、出桁を支える構造として登り梁と腕木があるが、登り梁形式は大正以前、腕木形式は大正以降のものが多い。



登り梁形式

一方、市中心部では、明治 33 年（1900）の大火により旧市域の 6 割が焼失し、当時の県令で新築の際は防火構造とすることが義務付けられていたために、山町筋^{やまちょうすじ}を中心に土蔵造りの町家が多い。

看板建築は明治初期に出現し始めたものと思われ、商家のファサード（正面）を石や金属板、セメントモルタルなどで覆っている。

ii) 農家

砺波平野^{と な み}や射水平野^{い み ず}でみられる伝統的な農家建築の形式としては、アズマダチを挙げることができる。この建築形式の特徴は、大きな切妻屋根を有しており、妻面では束柱や貫が意匠的に組まれ、その間が白壁に塗られていることである。散村集落の典型的形式とみなされがちだが、低平地の集村や丘陵地の山村などでもみることができる。砺波市立砺波散村地域研究所によると、アズマダチは主に明治後期から昭和 45 年（1970）頃までに建てられたものが多いが、比較的近年に建てられたものもある。



アズマダチ形式

iii) 社寺建築

昭和 55 年度（1980 年度）の調査では、第一次調査として 24 件の社寺建築の調査が実施され、この中から文化財的価値の特により高い総持寺^{そう じ じ}、国泰寺^{こくたい じ}、移田八幡宮^{いかだ はちまんぐう}、西念寺^{さいねん じ}等について第二次調査が行われた。

総持寺、国泰寺については第2章の68ページ、141ページを参照されたい。

移田八幡宮は中田にあるもので、拝殿は寛政11年（1799）松井角平の作と伝えられ、規模は小さいが中門・透垣を備え神域を形成しており貴重である。

西念寺は、立野にある浄土真宗寺院である。はじめは天台宗であったが、応仁の頃に一向宗に帰依し、大永2年（1522）に本願寺門徒となった。本堂は文化7年（1810）建立で、正面7間、側面7間半の大規模なもので、入母屋造り・平入り・棧瓦葺の向拝を設けている。

このほかにも、利長を祭神とする関野神社など、市内には数多くの歴史的な社寺が残されている。なお、関野神社については第2章の63ページを参照されたい。

②伝統的建造物群

市内文化財悉皆的調査の結果が示すように、本市には多くの伝統的建造物群（歴史的町並み）がある。これらの地区は、かつての主要な道や河川の付近に位置しており、その立地的条件を活かして、多くの物や人が行き交う宿場町や在郷町などとして発達してきたところである。特徴的な性格を持った町並みとして、伏木みなと町、勝興寺寺内町、戸出・中田、福岡を挙げることができる。なお、各地区における歴史的建造物の詳細については、『高岡市歴史文化基本構想 高岡市の文化財編』の巻末資料（市内文化財リスト）を参照されたい。

i) 伏木みなと町

伏木みなと町は、市内を南北に流れる小矢部川と日本海の合流地点に位置する町である。この地では、古代より船を利用した交易が行われており、近世以降は北前船による海運を生業に、多くの廻船問屋が誕生するなど、日本海側の主要な港として発展してきた。近代以降には、次々と港の近代化が図られ工業化が進むなど、国内だけでなく環日本海貿易の拠点として大きな発展を遂げた。町並みの特徴としては、みなと町らしくバラエティに富んだ建物があることが挙げられる。木造・2階建て・真壁造り・登り梁形式の伝統的な町家から、土蔵造り商家や銅板やセメントモルタルがあしらわれた看板建築など、それぞれの時代を象徴する建物が建ち並び、町の歴史を感じさせる。

ii) 勝興寺寺内町

勝興寺寺内町は、浄土真宗本願寺派の勝興寺を中心に形成された町並みである。勝興寺は蓮如上入縁の由緒ある寺院で、境内地は古代には越中の国庁があった地と推定され、中世には古国府城が置かれており、現在でも境内の周囲には城郭らしい堀と土塁が張り巡らされている。寺内町には、門前に同寺の子院や役寺のほか、そこから港へと延びる参道沿いには古い表構えを残す住宅などが建ち並ぶ。

iii) 戸出・中田

戸出・中田の町並みは、中世からの重要な道であった戸出・中田往来を中心に形成された町並みである。戸出・中田往来は、江戸時代になり高岡に城が築かれるまでは街道の主要ルートであり、築城後も藩主の鷹狩りの際や幕府が將軍の代替わりの際に全国へ派遣した巡見使の視察ルートともなった。現在は、道沿いに明治期以降に建設された伝統的な町家が散見される。また、この地域は加賀藩の主要な穀倉地帯である砺波平野の一部でもあり、道を離れると砺波平野に象徴的なアズマダチ民家や田園、用水、屋敷林などからなる農村風景が広がっている。

iv) 福岡

街道沿いには菅笠問屋の町並みがある。江戸時代以降、福岡を中心とした小矢部川周辺地域では、菅笠が盛んに作られており、福岡の街道沿いは、菅笠の集散地として発展した。町並みは、主に木造・2階建て・真壁造りの町家で構成されるが、この地域の町家の特徴として、オイの上に菅笠を保管するための中二階を設けた例が多いことが挙げられる。また、他地域に比べ、大戸や潜り戸など戸口構えをしっかりと残した家が多い。

③伝統文化

本市には、加賀藩ゆかりの茶道や能のほか、北陸の風土を土壤に人々の生活の中で生み出された生活習慣など、固有の伝統文化が根付いている。

前述の市内文化財体系的調査では、市の風景や生活文化に寄与しているものを幅広く文化財と捉え、「自然環境」、「生活空間」、「伝統文化」として新たに分類を行った。そこで、伝統文化については『高岡市歴史文化基本構想 高岡市の文化財編』の90～104ページ及び市内文化財リストを参照されたい。

（6）特産品、工芸品、料理等

本計画の歴史的風致に特に関係が深いものについて以下に挙げる。

①高岡銅器

高岡の銅器産業は、約400年もの間受け継がれてきた伝統産業である。高岡市内では高岡大仏をはじめとした高岡銅器の作品を見ることができる。第1章の17ページや28ページを参照されたい。

②高岡漆器

漆器産業も、銅器産業と同様に約400年の歴史がある。現在の高岡漆器の特徴である3つの技法は明治初期までに確立され、歴代の名工によって伝えられてきた。第1章の17ページや30ページを参照されたい。

③越中福岡の菅笠

江戸時代に加賀藩より奨励を受けて積極的に生産されるようになり、次第に全国へ販路を拡大していった。越中福岡の菅笠のシェアは全国の大部分を占めている。第1章の18ページや30ページを参照されたい。

④たけのこ料理

高岡市西田のたけのこは、粘土質の土壌で育つため、柔らかくて歯ごたえがよく、アクが少ないのが特徴である。国泰寺の周辺に建ち並ぶ複数のたけのこ料理屋では、春になると、朝掘りのみずみずしいたけのこを素材に、たけのこ飯、味噌汁、てんぷら、酢の物などのメニューを提供している。

（7）地域特性をあらわす関連文化財群

高岡市歴史文化基本構想では、高岡の歴史や風土を象徴するいくつかのストーリーに関連する文化財を一定のまとまりとして認識し、総体的に価値の顕在化を図るために、8つの関連文化財群を設定した。

これらの関連文化財群は、教育現場や生涯学習の場で文化財を学ぶ際に、より深い理解の手助けとなるほか、今後文化財に関連する計画の立案や整備事業などが図られる際に関連文化財群の特徴や保存・活用の方針に基づいた取扱いを検討することで、文化財本来の価値の損失が軽減するといった役割を果たすことが期待される。

以下に関連文化財群の概要を示すが、詳細については『高岡市歴史文化基本構想 保存・活用編』の19～61ページを参照されたい。

i) 商工業の町・高岡の成立と繁栄に関わる文化財群

高岡の商工業都市への成長に大きな役割を果たした工芸技術や流通に関する文化財と、商工業都市への成長の過程で生み出された文化財群

ii) 高岡御車山祭と祭りを支える職人文化に関わる文化財群

高岡御車山に関する山車や巡行路、行事内容、町のしつらえなどの文化財と、山車の華麗な装飾を生み出した工芸技術に関わる文化財群

iii) 高岡鋳物に関わる文化財群

金屋町から始まった鋳物の歴史に関わる文化財群と、その結果生み出された作品などの文化財群

iv) みなと町伏木の交流と物流に関わる文化財群

古来より小矢部川の水運機能と深く結びつき発達したみなと町伏木に関わる文化財群

v) 勝興寺と寺内町しょうこうじ じないちょうに関わる文化財群

越中の触頭として強大な勢力を誇った勝興寺と、その門前に形成された寺内町しょうこうじ じないちょうに関わる文化財群

vi) 越中国府に関わる文化財群

奈良時代、伏木の地に置かれた越中国府や、国守として赴任した大伴家持おおとものやかもちなどに関わる文化財群

vii) 菅の生産と菅笠すがづくりに関わる文化財群

菅田すがたや菅干すがぼしなどの景観、菅問屋すがの建ち並ぶ町並みや菅笠製作技術など、菅笠すががさの生産に関連する文化財群

viii) 農の風景に関わる文化財群

庄川しょうがわと小矢部川おやべがわが形成した砺波平野・射水平野となみ いみずで早くから行われた農に関わる風景や祭礼行事などの文化財群

この関連文化財群をもとに、第1期計画では以下の風致を設定した。

- 1 商人のまちと祭礼行事に見る歴史的風致
- 2 利長・利常としなが としつねへの報恩感謝と前田家の遺産に見る歴史的風致
- 3 鋳物のまち金屋かなやに見る歴史的風致
- 4 北の玄関口伏木・吉久ふしき よしひさと祭礼行事に見る歴史的風致
- 5 勝興寺と寺内町しょうこうじ じないちょうに見る歴史的風致
- 6 旧北陸道と菅笠すががさづくりに見る歴史的風致

第1期計画を進める中で、日本遺産認定を契機とする歴史認識の捉え方の変化などがあり、今回の第2期計画においては風致の考え方を再整理することとした。詳細については第2章にて説明する。

(8) 日本遺産

文化庁が創設した地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリー、いわゆる「日本遺産」について、本市は平成27年（2015）4月に日本遺産第1弾として「加賀前田家ゆかりの町民文化が花咲くまち高岡 - 人、技、心 - 」が認定され、平成30年（2018）5月に「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間（北前船寄港地・船主集落）」が追加認定された。

1件目の「加賀前田家ゆかりの町民文化が花咲くまち高岡 - 人、技、心 - 」は、開町まもなく最悪のピンチを最高のチャンスに変えたお殿様と町民たちの物語である。

としなが^{としなが}が築いた高岡城が廃城となった後、としつね^{としつね}は浮足立つ町民に活を入れ、商工を中心とした町への転換政策を実施した。鋳物や漆工などの独自生産力を高める一方、穀倉地帯を控え、良港を持つ利点を活かし、米や綿などの取引拠点として「加賀藩の台所」と呼ばれる程の隆盛を極めた。一方、町民は地域にその富を還元し、町民自身が担い手となり、祭礼などの文化を形成した。現在も、町並みや生業、伝統行事などに高岡町民の歩みが色濃く残され、語り継がれている。

2件目の「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間（北前船寄港地・船主集落）」^{きたまえぶね き こう ち}は、荒波を越え、動く総合商社として巨万の富を生み、各地に繁栄をもたらした北前船^{きたまえぶね}を主題とした物語である。全国に残る寄港地・船主集落が、時を重ねて彩られた異空間として語られている。